



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第197集

日高市

宿東遺跡

一般国道407号線埋蔵文化財発掘調査報告書
〈第1分冊〉

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



C区第6号住居跡出土土器



A区第48号住居跡出土土器



D区第36号住居跡出土土器



A区第13号埋甕出土土器



A区第135号土壙出土ヒスイ製垂飾

序

埼玉県内における道路網は、県民生活の多様化と地域の活性化、産業活動の円滑化などに対応するために、一般国道・県道の拡充・整備が進められてきました。

県の5か年計画の中にも、県内一時間道路網構想を目指した道路網の整備が盛り込まれており、国道のバイパス整備などによる4車線化が図られております。

また、平成7年度に首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の一部開通が実現し、今後一層の東西交通の活発化が予想され、この方面の国道の強化も急務となっております。一般国道407号線日高バイパスの建設はこうした施策の一環として計画されたものです。

日高市高萩に所在する宿東遺跡はその一部が日高バイパス建設用地内に存在しており、その取り扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、実施いたしました。

日高市は埼玉県南西部に位置し、背後に外秩父の山並みを控えた豊かな自然に恵まれております。また、聖天院や高麗神社など歴史的・文化的に重要な意味を持つ数多くの史跡が残されております。また、埋蔵文化財も豊富で、旧石器時代から現代に至るまで脈々と受け継がれてきた先人達の暮らしを今に伝えております。宿東遺跡もこうした埋蔵文化財の一つです。

発掘調査の結果、縄文時代中期の大規模な集落が発見されました。多くの竪穴住居跡や土壌によって構成される当時のムラの姿が明らかになりましたが、なかでも調査区中央付近から発見された掘立柱建物群は県内最古のものとして注目されます。

また、土壌から出土したヒスイは国内では新潟県姫川流域でのみ産出するもので、遠隔地との間で物資の交流が行われていたことを裏付ける貴重な資料の一つであるといえます。

これらの成果をまとめたものが本書であります。埋蔵文化財の保護、教育普及さらに学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力をいただきました埼玉県土木部道路建設課、同飯能土木事務所、日高市教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県日高市高萩字宿東に所在する宿東遺跡（略号SKH）の発掘調査報告書である。
文化庁指示通知は平成6年7月20日付け委保第2の064号、平成7年4月12日付け教文第2-2号である。
2. 遺跡の略称は、発掘調査時の遺跡のコード番号である「29-135」を用いている。
3. 発掘調査は、一般国道407号バイパス建設にともなう事前調査である。埼玉県教育局生涯学習文化財保護課の調整のもと、埼玉県土木部道路建設課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査は細田勝・福田聖・上野真由美・渡辺清志が担当し、平成6年4月1日から平成7年12月31日まで実施した。報告書作成作業は細田勝・渡辺清志が担当し、平成8年4月1日から平成10年3月31日まで実施し、遠山実生の協力を得た。発掘調査及び整理事業の組織は3ページに記した。
5. 出土品の整理及び実測、作表は細田・渡辺が主に
行い、奈良時代の遺物は栗岡潤、近世の遺物は水口由起子が行った。また、縄文時代の土・石製品のすべてと縄文土器の一部を遠山が行った。発掘調査時の写真撮影は細田勝・福田聖・上野真由美・渡辺清志が行い、遺物の撮影は大屋道則・渡辺清志が行った。
6. 遺跡の基準点測量と航空写真は株式会社シン技術コンサルに委託した。縄文土器のカラー写真・展開写真は小川忠博氏に委託した。分析・鑑定については、黒曜石の原産地同定を第四紀地質研究所に委託した。
7. 本書の編集は渡辺が担当した。
8. 本書に掲載した資料は平成10年4月1日以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
9. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、VI-2-(8)を水口が、それ以外を渡辺が行った。
10. 本書の作成にあたり日高市教育委員会からご教示・ご協力を賜った。記して謝意を表します。

凡例

1. 本書の遺跡全測図におけるXYの座標は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系に基づく座標軸を表す。各遺構図における方位は全て座標北を示す。

2. グリッドは10m×10m方眼で設定し、この中に必要に応じて2m×2mの小グリッドを設定した。

本遺跡のグリッド配置は、発掘調査開始時点でA区北端=A-1区を起点としてグリッドを設定している。このため、これより北および西の調査区ではグリッドの進行が変則となっている。本来新たに起点を設けて、統一されたグリッド呼称を振り直すべきところではあるが、一次資料との比較の際の混乱を避けるためにあえて発掘調査時のグリッド呼称を踏襲した。詳細は第3図および各発掘区の遺構全体図を参照のこと。

3. 遺構図および実測図の縮尺は原則として以下の通りである。

遺構図	住居跡・掘立柱建物跡・土壙	…1/60
	炉跡・埋甕等微細図	…1/30
遺物図	縄文土器	…1/5

石器	剥片石器	…2/3
	打製石斧・石皿等	…1/3
	須恵器	…1/4

その他のものについてはその都度スケールを表して示した。

4. 遺構の略号は次の通りである。

SJ	=住居跡	SX	=住居跡状遺構
SB	=掘立柱建物跡	SK	=土壙
SD	=溝		

5. 住居跡平面図中のスクリーントーンは焼土の範囲を、遺構断面図中の斜線部分は地山を示す。また、縄文土器展開図中の網掛けは地文範囲を示す。その他のスクリーントーンについては個別に例を付した。

6. 各区遺構全体図中の記号は次のとおりである。

炉跡	…●
埋甕	…☆

7. 遺構断面図における水平数値は海拔高度を示しており、単位はmである。

目次

口絵

序

例言

凡例

〈第1分冊〉

I 調査の概要	1	(1) 住居跡	347
1. 発掘調査に至る経過	1	(2) 土壌	379
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(3) 埋甕	381
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(4) 溝	382
II 遺跡の立地と環境	4	(5) グリッド出土土器	386
III 遺跡の概要	5	(6) 土製品	386
IV A区の調査	10	(7) 石器	388
1. 調査の概要	10	(8) 中・近世の遺物	393
2. 検出された遺構と遺物	14	VII D区の調査	394
(1) 住居跡	14	1. 調査の概要	394
(2) 掘立柱建物跡	250	2. 検出された遺構と遺物	397
(3) 土壌	253	(1) 住居跡	397
(4) 埋甕	306	(2) 掘立柱建物跡	525
(5) グリッド出土土器	312	(3) 土壌	525
(6) 石器	317	(4) 配石遺構	541
(7) 土・石製品	326	(5) 溝	543
〈第2分冊〉		(6) グリッド出土土器	544
V B区の調査	334	(7) 石器	550
1. 調査の概要	334	(8) 土・石製品	560
2. 検出された遺構と遺物	335	VIII 結語	561
(1) 住居跡	335	1. 加曾利E式土器について	561
(2) 石器	343	2. 加曾利EⅢ式期の住居跡について	575
VI C区の調査	344	3. 掘立柱建物跡	580
1. 調査の概要	344	主要参考文献	582
2. 検出された遺構と遺物	347	付編	584

挿図目次

第1図	埼玉県の地形	5	第35図	A区第11号住居跡出土土器	43
第2図	周辺の遺跡	6	第36図	A区第13号住居跡	44
第3図	遺跡周辺の地形	7	第37図	A区第14号住居跡	45
第4図	調査区およびグリッド配置図	9	第38図	A区第15号住居跡	46
第5図	A区遺構全測図(1)	11	第39図	A区第15号住居跡遺物分布図	47
第6図	A区遺構全測図(2)	12	第40図	A区第15号住居跡出土土器(1)	48
第7図	A区遺構全測図(3)	13	第41図	A区第15号住居跡出土土器(2)	49
第8図	A区第1号住居跡	15	第42図	A区第16号住居跡	50
第9図	A区第1号住居跡遺物分布図	16	第43図	A区第16号住居跡遺物分布図	51
第10図	A区第1号住居跡出土土器(1)	17	第44図	A区第16号住居跡出土土器(1)	52
第11図	A区第1号住居跡出土土器(2)	18	第45図	A区第16号住居跡出土土器(2)	53
第12図	A区第2号住居跡	20	第46図	A区第16号住居跡出土土器(3)	54
第13図	A区第2号住居跡遺物分布図	21	第47図	A区第17号住居跡	56
第14図	A区第2号住居跡出土土器(1)	21	第48図	A区第17号住居跡出土土器(1)	57
第15図	A区第2号住居跡出土土器(2)	22	第49図	A区第19号住居跡	58
第16図	A区第2号住居跡出土土器(3)	23	第50図	A区第19号住居跡遺物分布図	59
第17図	A区第3号住居跡	24	第51図	A区第19号住居跡出土土器(1)	60
第18図	A区第4号住居跡	25	第52図	A区第19号住居跡出土土器(2)	61
第19図	A区第5号住居跡	27	第53図	A区第19号住居跡出土土器(3)	62
第20図	A区第5号住居跡出土土器(1)	28	第54図	A区第19号住居跡出土土器(4)	63
第21図	A区第5号住居跡出土土器(2)	29	第55図	A区第19号住居跡出土土器(5)	65
第22図	A区第6号住居跡	31	第56図	A区第19号住居跡出土土器(6)	66
第23図	A区第6号住居跡出土土器	32	第57図	A区第20・21・23号住居跡	67
第24図	A区第7号住居跡	33	第58図	A区第20・21・23号住居跡遺物分布図	68
第25図	A区第7号住居跡出土土器(1)	34	第59図	A区第20号住居跡出土土器	69
第26図	A区第7号住居跡出土土器(2)	35	第60図	A区第21号住居跡出土土器	70
第27図	A区第8号住居跡	36	第61図	A区第23号住居跡出土土器	71
第28図	A区第8号住居跡出土土器	37	第62図	A区第22号住居跡	72
第29図	A区第9号住居跡	38	第63図	A区第24号住居跡	73
第30図	A区第9号住居跡出土土器	39	第64図	A区第24号住居跡出土土器(1)	73
第31図	A区第10号住居跡	40	第65図	A区第24号住居跡出土土器(2)	74
第32図	A区第10号住居跡出土土器(1)	41	第66図	A区第26号住居跡	75
第33図	A区第10号住居跡出土土器(2)	41	第67図	A区第26号住居跡遺物分布図	76
第34図	A区第11号住居跡	42			

第68图	A区第26号住居跡出土土器	77	第99图	A区第40~43号住居跡出土土器(6)	114
第69图	A区第27号住居跡	78	第100图	A区第40~43号住居跡出土土器(7)	115
第70图	A区第27号住居跡出土土器	79	第101图	A区第44号住居跡	117
第71图	A区第28号住居跡	80	第102图	A区第44号住居跡炉跡	118
第72图	A区第28号住居跡出土土器	81	第103图	A区第44号住居跡遺物分布图	119
第73图	A区第29号住居跡	82	第104图	A区第44号住居跡出土土器(1)	120
第74图	A区第30号住居跡	83	第105图	A区第44号住居跡出土土器(2)	121
第75图	A区第30号住居跡出土土器	84	第106图	A区第44号住居跡出土土器(3)	122
第76图	A区第31号住居跡	86	第107图	A区第44号住居跡出土土器(4)	123
第77图	A区第33号住居跡	87	第108图	A区第44号住居跡出土土器(5)	124
第78图	A区第33号住居跡出土土器	88	第109图	A区第44号住居跡出土土器(6)	126
第79图	A区第34号住居跡	89	第110图	A区第44号住居跡出土土器(7)	127
第80图	A区第36号住居跡	90	第111图	A区第44号住居跡出土土器(8)	129
第81图	A区第37号住居跡	91	第112图	A区第44号住居跡出土土器(9)	130
第82图	A区第37号住居跡出土土器	92	第113图	A区第44号住居跡出土土器(10)	131
第83图	A区第39号住居跡	94	第114图	A区第45号住居跡	132
第84图	A区第39号住居跡遺物分布图	95	第115图	A区第45号住居跡出土土器(1)	133
第85图	A区第39号住居跡出土土器(1)	96	第116图	A区第45号住居跡出土土器(2)	133
第86图	A区第39号住居跡出土土器(2)	97	第117图	A区第46号住居跡	134
第87图	A区第39号住居跡出土土器(3)	99	第118图	A区第46号住居跡炉跡	135
第88图	A区第39号住居跡出土土器(4)	100	第119图	A区第46号住居跡遺物分布图	136
第89图	A区第40·41号住居跡	103	第120图	A区第46号住居跡出土土器(1)	137
第90图	A区第42号住居跡	104	第121图	A区第46号住居跡出土土器(2)	139
第91图	A区第43号住居跡	105	第122图	A区第46号住居跡出土土器(3)	140
第92图	A区第43号住居跡炉跡	106	第123图	A区第46号住居跡出土土器(4)	141
第93图	A区第40~43号住居跡遺物分布图	107	第124图	A区第47号住居跡	142
第94图	A区第40~43号住居跡出土土器(1)	108	第125图	A区第47号住居跡炉跡	143
第95图	A区第40~43号住居跡出土土器(2)	109	第126图	A区第47号住居跡遺物分布图	144
第96图	A区第40~43号住居跡出土土器(3)	111	第127图	A区第47号住居跡出土土器(1)	145
第97图	A区第40~43号住居跡出土土器(4)	112	第128图	A区第47号住居跡出土土器(2)	147
第98图	A区第40~43号住居跡出土土器(5)	113	第129图	A区第47号住居跡出土土器(3)	148
			第130图	A区第47号住居跡出土土器(4)	149
			第131图	A区第48号住居跡	151
			第132图	A区第48号住居跡炉跡·埋甕	152

第133图	A区第48号住居迹遗物分布图	153	第168图	A区第57号住居迹出土土器	192
第134图	A区第48号住居迹出土土器(1)	154	第169图	A区第58号住居迹	193
第135图	A区第48号住居迹出土土器(2)	155	第170图	A区第58号住居迹出土土器	193
第136图	A区第48号住居迹出土土器(3)	156	第171图	A区第59号住居迹	194
第137图	A区第49号住居迹	158	第172图	A区第59号住居迹出土土器	195
第138图	A区第49号住居迹出土土器(1)	159	第173图	A区第60号住居迹	196
第139图	A区第49号住居迹出土土器(2)	160	第174图	A区第60号住居迹出土土器	197
第140图	A区第49号住居迹出土土器(3)	161	第175图	A区第61·63号住居迹	198
第141图	A区第51号住居迹	163	第176图	A区第61号住居迹出土土器(1)	199
第142图	A区第51号住居迹出土土器	164	第177图	A区第61号住居迹出土土器(2)	199
第143图	A区第52号住居迹	165	第178图	A区第62号住居迹	201
第144图	A区第52号住居迹炉迹	166	第179图	A区第62号住居迹出土土器(1)	202
第145图	A区第52号住居迹遗物分布图	167	第180图	A区第62号住居迹出土土器(2)	203
第146图	A区第52号住居迹出土土器(1)	168	第181图	A区第62号住居迹出土土器(3)	204
第147图	A区第52号住居迹出土土器(2)	169	第182图	A区第64号住居迹	205
第148图	A区第52号住居迹出土土器(3)	171	第183图	A区第64号住居迹出土土器	206
第149图	A区第52号住居迹出土土器(4)	173	第184图	A区第65号住居迹	207
第150图	A区第53号住居迹	174	第185图	A区第65号住居迹炉迹	208
第151图	A区第53号住居迹出土土器	175	第186图	A区第65号住居迹出土土器(1)	209
第152图	A区第54号住居迹	175	第187图	A区第65号住居迹出土土器(2)	210
第153图	A区第54号住居迹出土土器	176	第188图	A区第66号住居迹	211
第154图	A区第55号住居迹	177	第189图	A区第67号住居迹	212
第155图	A区第55号住居迹遗物分布图(1)	178	第190图	A区第68号住居迹	213
第156图	A区第55号住居迹遗物分布图(2)	179	第191图	A区第68号住居迹出土土器(1)	214
第157图	A区第55号住居迹出土土器(1)	180	第192图	A区第68号住居迹出土土器(2)	215
第158图	A区第55号住居迹出土土器(2)	181	第193图	A区第68号住居迹出土土器(3)	216
第159图	A区第55号住居迹出土土器(3)	182	第194图	A区第69号住居迹	217
第160图	A区第55号住居迹出土土器(4)	183	第195图	A区第70号住居迹	218
第161图	A区第56号住居迹	185	第196图	A区第70号住居迹出土土器	219
第162图	A区第56号住居迹遗物分布图	186	第197图	A区第71·99号住居迹	220
第163图	A区第56号住居迹炉迹·埋甕	187	第198图	A区第99号住居迹出土土器	220
第164图	A区第56号住居迹出土土器(1)	188	第199图	A区第72号住居迹	221
第165图	A区第56号住居迹出土土器(2)	189	第200图	A区第73号住居迹	222
第166图	A区第56号住居迹出土土器(3)	190	第201图	A区第73号住居迹埋甕	223
第167图	A区第57号住居迹	191	第202图	A区第73号住居迹出土土器	223
			第203图	A区第74号住居迹	224
			第204图	A区第75号住居迹(1)	225

第205图	A区第75号住居跡 (2)	226	第242图	A区土壙 (9)	262
第206图	A区第76号住居跡	227	第243图	A区土壙 (10)	263
第207图	A区第77号住居跡	228	第244图	A区土壙 (11)	264
第208图	A区第78号住居跡	229	第245图	A区土壙 (12)	265
第209图	A区第79号住居跡	230	第246图	A区土壙 (13)	266
第210图	A区第80号住居跡	231	第247图	A区土壙 (14)	267
第211图	A区第81号住居跡	232	第248图	A区土壙 (15)	268
第212图	A区第82号住居跡	233	第249图	A区土壙出土土器 (1)	273
第213图	A区第82号住居跡出土土器	234	第250图	A区土壙出土土器 (2)	274
第214图	A区第83号住居跡	234	第251图	A区土壙出土土器 (3)	275
第215图	A区第84号住居跡	235	第252图	A区土壙出土土器 (4)	276
第216图	A区第85号住居跡	236	第253图	A区土壙出土土器 (5)	277
第217图	A区第85号住居跡出土土器	237	第254图	A区土壙出土土器 (6)	278
第218图	A区第86号住居跡	238	第255图	A区土壙出土土器 (7)	280
第219图	A区第87号住居跡	239	第256图	A区土壙出土土器 (8)	281
第220图	A区第88号住居跡	240	第257图	A区土壙出土土器 (9)	283
第221图	A区第89号住居跡	241	第258图	A区土壙出土土器 (10)	284
第222图	A区第90号住居跡	242	第259图	A区土壙出土土器 (11)	285
第223图	A区第91号住居跡	243	第260图	A区土壙出土土器 (12)	287
第224图	A区第92号住居跡	244	第261图	A区土壙出土土器 (13)	288
第225图	A区第94号住居跡	245	第262图	A区土壙出土土器 (14)	289
第226图	A区第95号住居跡	246	第263图	A区土壙出土土器 (15)	291
第227图	A区第95号住居跡出土土器	247	第264图	A区土壙出土土器 (16)	292
第228图	A区第96号住居跡出土土器	247	第265图	A区土壙出土土器 (17)	293
第229图	A区第96·97号住居跡	248	第266图	A区土壙出土土器 (18)	295
第230图	A区第100号住居跡	249	第267图	A区土壙出土土器 (19)	296
第231图	A区第3号住居跡状遺構	250	第268图	A区土壙出土土器 (20)	297
第232图	A区第1·2号掘立柱建物跡	251	第269图	A区土壙出土土器 (21)	299
第233图	A区第3·4号掘立柱建物跡	252	第270图	A区土壙出土土器 (22)	300
第234图	A区土壙 (1)	254	第271图	A区土壙出土土器 (23)	301
第235图	A区土壙 (2)	255	第272图	A区土壙出土土器 (24)	303
第236图	A区土壙 (3)	256	第273图	A区土壙出土土器 (25)	304
第237图	A区土壙 (4)	257	第274图	A区土壙出土土器 (26)	305
第238图	A区土壙 (5)	258	第275图	A区埋甕 (1)	307
第239图	A区土壙 (6)	259	第276图	A区埋甕 (2)	308
第240图	A区土壙 (7)	260	第277图	A区埋甕出土土器 (1)	309
第241图	A区土壙 (8)	261	第278图	A区埋甕出土土器 (2)	310

第279図	A区埋甕出土土器（3）	311	第313図	C区第3号住居跡炉跡及び遺物分布図	355
第280図	A区グリッド出土土器（1）	313	第314図	C区第3号住居跡出土土器（1）	356
第281図	A区グリッド出土土器（2）	314	第315図	C区第3号住居跡出土土器（2）	357
第282図	A区グリッド出土土器（3）	315	第316図	C区第3号住居跡出土土器（3）	358
第283図	A区出土石器（1）	317	第317図	C区第3号住居跡出土土器（4）	359
第284図	A区出土石器（2）	318	第318図	C区第3号住居跡出土土器（5）	360
第285図	A区出土石器（3）	319	第319図	C区第4号住居跡	361
第286図	A区出土石器（4）	320	第320図	C区第4号住居跡炉跡	362
第287図	A区出土石器（5）	321	第321図	C区第4号住居跡出土土器（1）	363
第288図	A区出土石器（6）	322	第322図	C区第4号住居跡出土土器（2）	364
第289図	A区出土石器（7）	323	第323図	C区第5号住居跡	366
第290図	A区出土石器（8）	324	第324図	C区第5号住居跡炉跡及び遺物分布図	367
第291図	A区出土石器（9）	325	第325図	C区第5号住居跡出土土器（1）	369
第292図	A区出土石器（10）	327	第326図	C区第5号住居跡出土土器（2）	370
第293図	A区出土石器（11）	328	第327図	C区第5号住居跡出土土器（3）	371
第294図	A区出土石器（12）	329	第328図	C区第6号住居跡	372
第295図	A区出土土・石製品	330	第329図	C区第6号住居跡遺物分布図	373
第296図	B区遺構全測図	334	第330図	C区第6号住居跡出土土器（1）	374
第297図	B区第1～3号住居跡（1）	335	第331図	C区第6号住居跡出土土器（2）	375
第298図	B区第1～3号住居跡（2）	336	第332図	C区第6号住居跡出土土器（3）	376
第299図	B区第1～3号住居跡炉跡	337	第333図	C区第7号住居跡	377
第300図	B区第1～3号住居跡遺物分布図	338	第334図	C区第7号住居跡出土土器	378
第301図	B区第1～3号住居跡出土土器（1）	339	第335図	C区土壇（1）	379
第302図	B区第1～3号住居跡出土土器（2）	340	第336図	C区土壇（2）	380
第303図	B区出土石器	342	第337図	C区埋甕	381
第304図	C区遺構全測図	345	第338図	C区埋甕出土土器	382
第305図	C区第1号住居跡	346	第339図	C区溝（1）	383
第306図	C区第1号住居跡遺物分布図	347	第340図	C区溝（2）	384
第307図	C区第1号住居跡出土土器	348	第341図	C区溝（3）	385
第308図	C区第2号住居跡	350	第342図	C区溝（4）	385
第309図	C区第2号住居跡遺物分布図	351	第343図	C区グリッド出土土器（1）	386
第310図	C区第2号住居跡出土土器（1）	352	第344図	C区グリッド出土土器（2）	387
第311図	C区第2号住居跡出土土器（2）	353	第345図	C区出土土製品	388
第312図	C区第3号住居跡	354	第346図	C区出土石器（1）	388

第347図	C区出土石器(2)	389	第383図	D区第9号住居跡	423
第348図	C区出土石器(3)	390	第384図	D区第10号住居跡	424
第349図	C区出土石器(4)	391	第385図	D区第11号住居跡	425
第350図	C区出土石器(5)	392	第386図	D区第11号住居跡炉跡	426
第351図	中・近世の遺物	393	第387図	D区第11号住居跡遺物分布図	426
第352図	D区遺構全測図	395	第388図	D区第11号住居跡出土土器(1)	427
第353図	D区第1号住居跡	396	第389図	D区第11号住居跡出土土器(2)	428
第354図	D区第1号住居跡遺物分布図	397	第390図	D区第11号住居跡出土土器(3)	429
第355図	D区第1号住居跡出土土器(1)	397	第391図	D区第11号住居跡出土土器(4)	430
第356図	D区第1号住居跡出土土器(2)	398	第392図	D区第12号住居跡	431
第357図	D区第2号住居跡	399	第393図	D区第12号住居跡出土土器	432
第358図	D区第3号住居跡	400	第394図	D区第13号住居跡	433
第359図	D区第3号住居跡遺物分布図	401	第395図	D区第13号住居跡出土土器	433
第360図	D区第3号住居跡出土土器(1)	402	第396図	D区第14号住居跡	435
第361図	D区第3号住居跡出土土器(2)	402	第397図	D区第14号住居跡炉跡	436
第362図	D区第4号住居跡	403	第398図	D区第14号住居跡遺物分布図	436
第363図	D区第4号住居跡出土土器	403	第399図	D区第14号住居跡出土土器(1)	437
第364図	D区第5号住居跡	404	第400図	D区第14号住居跡出土土器(2)	438
第365図	D区第5号住居跡出土土器	404	第401図	D区第15号住居跡	439
第366図	D区第6号住居跡	406	第402図	D区第15号住居跡遺物分布図	440
第367図	D区第6号住居跡遺物分布図	407	第403図	D区第15号住居跡出土土器(1)	440
第368図	D区第6号住居跡出土土器(1)	408	第404図	D区第15号住居跡出土土器(2)	441
第369図	D区第6号住居跡出土土器(2)	409	第405図	D区第16号住居跡	442
第370図	D区第6号住居跡出土土器(3)	410	第406図	D区第17号住居跡	443
第371図	D区第6号住居跡出土土器(4)	411	第407図	D区第17号住居跡出土土器(1)	444
第372図	D区第6号住居跡遺物分布図(2)	412	第408図	D区第17号住居跡出土土器(2)	445
第373図	D区第6号住居跡出土土器(5)	413	第409図	D区第18号住居跡	446
第374図	D区第7号住居跡	414	第410図	D区第18号住居跡遺物分布図	447
第375図	D区第7号住居跡出土土器(1)	415	第411図	D区第18号住居跡出土土器(1)	448
第376図	D区第7号住居跡出土土器(2)	416	第412図	D区第18号住居跡出土土器(2)	449
第377図	D区第7号住居跡出土土器(3)	417	第413図	D区第19・20A・20B号住居跡	450
第378図	D区第8号住居跡	419	第414図	D区第19号住居跡出土土器	451
第379図	D区第8号住居跡遺物分布図	420	第415図	D区第20A号住居跡埋甕	452
第380図	D区第8号住居跡出土土器(1)	421	第416図	D区第20A号住居跡出土土器(1)	453
第381図	D区第8号住居跡出土土器(2)	422	第417図	D区第20A号住居跡出土土器(2)	453
第382図	D区第8号住居跡出土土器(3)	423			

第418图	D区第21·22号住居跡……………	454	第450图	D区第33号住居跡出土土器……………	483
第419图	D区第21·22号住居跡遺物分布图…	455	第451图	D区第37号住居跡出土土器(1)…	484
第420图	D区第21·22号住居跡出土土器(1) ……………	456	第452图	D区第37号住居跡出土土器(2)…	485
第421图	D区第21·22号住居跡出土土器(2) ……………	457	第453图	D区第56号住居跡出土土器(1)…	486
第422图	D区第21·22号住居跡出土土器(3) ……………	458	第454图	D区第56号住居跡出土土器(2)…	486
第423图	D区第23·31·39号住居跡……………	459	第455图	D区第61号住居跡埋甕……………	487
第424图	D区第23号住居跡出土土器……………	460	第456图	D区第61号住居跡出土土器(1)…	488
第425图	D区第24·46·49号住居跡……………	461	第457图	D区第61号住居跡出土土器(2)…	489
第426图	D区第24号住居跡出土土器……………	462	第458图	D区第34号住居跡……………	490
第427图	D区第25号住居跡……………	462	第459图	D区第36号住居跡……………	491
第428图	D区第25号住居跡遺物分布图……………	463	第460图	D区第36号住居跡埋甕……………	492
第429图	D区第25号住居跡出土土器(1)…	463	第461图	D区第36号住居跡出土土器(1)…	493
第430图	D区第25号住居跡出土土器(2)…	464	第462图	D区第36号住居跡出土土器(2)…	494
第431图	D区第26·43·48号住居跡……………	465	第463图	D区第38号住居跡……………	495
第432图	D区第48住居跡埋甕·炉跡……………	466	第464图	D区第38号住居跡炉跡……………	496
第433图	D区第26·48号住居跡遺物分布图…	467	第465图	D区第38号住居跡埋甕……………	496
第434图	D区第26号住居跡出土土器……………	468	第466图	D区第38号住居跡出土土器(1)…	497
第435图	D区第48号住居跡出土土器(1)…	469	第467图	D区第38号住居跡出土土器(2)…	498
第436图	D区第48号住居跡出土土器(2)…	470	第468图	D区第38号住居跡出土土器(3)…	499
第437图	D区第27·44号住居跡……………	471	第469图	D区第40号住居跡……………	500
第438图	D区第29号住居跡……………	472	第470图	D区第40号住居跡出土土器……………	501
第439图	D区第29号住居跡遺物分布图……………	473	第471图	D区第45号住居跡……………	501
第440图	D区第29号住居跡出土土器(1)…	474	第472图	D区第47号住居跡……………	502
第441图	D区第29号住居跡出土土器(2)…	474	第473图	D区第47号住居跡出土土器(1)…	503
第442图	D区第30·35号住居跡……………	475	第474图	D区第47号住居跡出土土器(2)…	504
第443图	D区第32号住居跡……………	476	第475图	D区第50号住居跡……………	505
第444图	D区第32号住居跡遺物分布图……………	477	第476图	D区第50号住居跡出土土器……………	505
第445图	D区第32号住居跡出土土器(1)…	478	第477图	D区第52号住居跡……………	506
第446图	D区第32号住居跡出土土器(2)…	479	第478图	D区第53·54号住居跡……………	507
第447图	D区第32号住居跡出土土器(3)…	480	第479图	D区第55号住居跡……………	507
第448图	D区第33·37·56·61·67号住居跡 ……………	481	第480图	D区第55号住居跡出土土器(1)…	508
第449图	D区第33·37·56·61·67号住居跡 遺物分布图……………	482	第481图	D区第55号住居跡出土土器(2)…	509
			第482图	D区第58号住居跡……………	509
			第483图	D区第58号住居跡出土土器……………	509
			第484图	D区第59号住居跡……………	510
			第485图	D区第59号住居跡出土土器……………	510
			第486图	D区第60·63号住居跡……………	511

第487図	D区第60・63号住居跡遺物分布図…512	第509図	D区土壙出土土器（2）……………533
第488図	D区第60号住居跡炉跡……………512	第510図	D区土壙出土土器（3）……………534
第489図	D区第60号住居跡出土土器（1）…513	第511図	D区土壙出土土器（4）……………535
第490図	D区第60号住居跡出土土器（2）…514	第512図	D区土壙出土土器（5）……………537
第491図	D区第60号住居跡出土土器（3）…515	第513図	D区土壙出土土器（6）……………538
第492図	D区第62号住居跡……………516	第514図	D区土壙出土土器（7）……………540
第493図	D区第62号住居跡遺物分布図……………517	第515図	D区第1号配石遺構……………541
第494図	D区第62号住居跡出土土器（1）…518	第516図	D区第1・2号溝……………542
第495図	D区第62号住居跡出土土器（2）…519	第517図	D区グリッド出土土器（1）……………545
第496図	D区第64号住居跡……………520	第518図	D区グリッド出土土器（2）……………546
第497図	D区第64号住居跡出土土器（1）…520	第519図	D区グリッド出土土器（3）……………547
第498図	D区第64号住居跡出土土器（2）…521	第520図	D区グリッド出土土器（4）……………549
第499図	D区第65号住居跡……………521	第521図	D区出土石器（1）……………550
第500図	D区第66号住居跡……………522	第522図	D区出土石器（2）……………551
第501図	D区第66号住居跡出土土器……………523	第523図	D区出土石器（3）……………552
第502図	D区第68号住居跡……………523	第524図	D区出土石器（4）……………553
第503図	D区第1号掘立柱建物跡……………524	第525図	D区出土石器（5）……………554
第504図	D区土壙（1）……………526	第526図	D区出土石器（6）……………555
第505図	D区土壙（2）……………527	第527図	D区出土石器（7）……………557
第506図	D区土壙（3）……………528	第528図	D区出土石器（8）……………559
第507図	D区土壙（4）……………529	第529図	D区出土土・石製品……………560
第508図	D区土壙出土土器（1）……………532		

写真図版目次

図版1	遺跡全景	図版11	A区第46・47・48号住居跡
図版2	遺跡遠景、A・B区全景	図版12	A区第48・52号住居跡
図版3	C区全景、D区全景	図版13	A区第52・53・54・55・56号住居跡
図版4	A区第1・2・5・6号住居跡	図版14	A区第56・57・58・59・60・61・63号住居跡
図版5	A区第5・7・8・11号住居跡	図版15	A区第59・60・61・63号住居跡
図版6	A区第11・15・16号住居跡	図版16	A区第61・62・64・65号住居跡
図版7	A区第17・19・20・21・23・24号住居跡	図版17	A区第65・68・73・80号住居跡
図版8	A区第26・27・28・33号住居跡	図版18	A区第81・82・85・87・95号住居跡
図版9	A区第37・39・40～43号住居跡	図版19	A区第96・97号住居跡
図版10	A区第44・45号住居跡		A区第1・2・3・4号掘立柱建物跡

- A区第48·49·50号土壤
- 图版20 A区第51·65·66·69·98·100号土壤
- 图版21 A区第101·121·124·125·128A·129·137号土壤
- 图版22 A区第138·139·152·191·194号土壤
A区第1号埋甕
- 图版23 A区第11·12·13·14·25号埋甕
- 图版24 A区第25号埋甕
B区第1~3号住居跡全景
C区第1号住居跡
- 图版25 C区第1·2·3号住居跡
- 图版26 C区第3·4·5号住居跡
- 图版27 C区第5·6·7号住居跡
- 图版28 C区第7号住居跡
C区第1·2号埋甕
C区第1·2·3·4号土壤
- 图版29 C区第3·4号土壤
C区第1号溝
- 图版30 C区第6·7·9·10·11·13·14·15·16号溝
D区第1号住居跡全景
- 图版31 D区第1·2·3·4·5号住居跡
- 图版32 D区第5·6·7号住居跡
- 图版33 D区第8·10·11号住居跡
- 图版34 D区第11·12·13·14号住居跡
- 图版35 D区第14·15·16·17号住居跡
- 图版36 D区第18·19·20A·20B号住居跡
- 图版37 D区第21·22·23·24·26·31·39·48号住居跡
- 图版38 D区第26·27·29·44·45·48号住居跡
- 图版39 D区第32·33·36号住居跡
- 图版40 D区第36·37号住居跡
- 图版41 D区第38号住居跡
- 图版42 D区第38·40·41·42号住居跡
- 图版43 D区第44·45·47·52·55号住居跡
- 图版44 D区第58·59·60·61·62号住居跡
- 图版45 D区第62·63·64·65·66号住居跡
- 图版46 D区第1号掘立柱建物跡
D区第1·2·5·6号土壤全景
- 图版47 D区第7·11·13·14·15·19号土壤
- 图版48 D区第20·21·31·40号土壤
- 图版49 D区第40·41·43·44号土壤
- 图版50 A区第44号住居跡出土土器展開写真
- 图版51 A区第14号埋甕·第62号住居跡·D区48号住居跡出土土器展開写真
- 图版52 A区第5·56·48号住居跡出土土器展開写真
- 图版53 C区第6号住居跡·A区第39号住居跡出土土器展開写真
- 图版54 D区第36号住居跡·C区第6号住居跡出土土器展開写真
- 图版55 D区第40B号土壤·第61号住居跡·B区第1~3号住居跡出土土器展開写真
- 图版56 D区第37号住居跡出土土器展開写真
- 图版57 A区第1·2·5·7号住居跡出土土器
- 图版58 A区第10·11·15·16号住居跡出土土器
- 图版59 A区第16·19号住居跡出土土器
- 图版60 A区第19号住居跡出土土器
- 图版61 A区第20·24·26号住居跡出土土器
- 图版62 A区第37·39·40~43号住居跡出土土器
- 图版63 A区第40~43·44号住居跡出土土器
- 图版64 A区第44号住居跡出土土器
- 图版65 A区第44·45号住居跡出土土器
- 图版66 A区第45·46号住居跡出土土器
- 图版67 A区第47·48号住居跡出土土器
- 图版68 A区第48·49·52号住居跡出土土器
- 图版69 A区第55·56·57号住居跡出土土器
- 图版70 A区第59·61·62·64·65号住居跡出土土器
- 图版71 A区第85号住居跡出土土器
A区第11·46·66·100·121号土壤出土土器
- 图版72 A区第1·14·25号埋甕出土土器
B区第1~3号住居跡出土土器
- 图版73 C区第1·2·3·4号住居跡出土土器
- 图版74 C区第4·5·6号住居跡出土土器

图版75 C区第6·7号住居迹出土土器

D区第1·3·6号住居迹出土土器

图版76 D区第6·7·8·13号住居迹出土土器

图版77 D区第14·15·17·18号住居迹出土土器

图版78 D区第20·21·25·29号住居迹出土土器

图版79 D区第32·37号住居迹出土土器

图版80 D区第38·48号住居迹出土土器

图版81 D区第55·60·61·62号住居迹出土土器

D区第2号土壙出土土器

图版82 D区第4·15·40B·43号土壙出土土器

图版83 A区第19号住居迹出土土器

图版84 A区第37·39号住居迹出土土器

图版85 A区第39·44号住居迹出土土器

图版86 A区第44号住居迹出土土器

图版87 A区第44·48号住居迹出土土器

图版88 A区第55号住居迹出土土器

图版89 B区第1~3号住居迹出土土器

C区第1号住居迹出土土器

图版90 C区第3号住居迹出土土器

图版91 C区第6号住居迹出土土器

D区第6号住居迹出土土器

图版92 D区第6号住居迹出土土器

图版93 D区第7号住居迹出土土器

图版94 D区第11号住居迹出土土器

图版95 D区第21·32号住居迹出土土器

图版96 D区第32·36号住居迹出土土器

图版97 A区出土石器

图版98 A区出土石器

B区出土石器

图版99 C区出土石器

图版100 D区出土石器

I 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、多様化する県民の生活圏の拡大に対応し、また高度化する産業活動の円滑化などを図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視しながら、県内1時間道路網構想を目指した道路網の整備を推進している。国道の整備については、地域高規格道路の導入整備を進めるほか、バイパス整備などによる4車線化及び東西方向の国道の強化などが図られている。一般国道407号日高バイパス建設事業は、このような構想のもとに計画された。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種の開発事業に対応すべく、開発部局と事前協議を重ね、文化財保護と開発事業との調整を図っているところである。

本道路事業にかかる埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについては、埼玉県土木部道路建設課長より文化財保護課長にあて、平成5年9月28日付け道建第268号で照会があった。これに対し、文化財保護課では、平成5年10月21日に埋蔵文化財の範囲確認調査を現地で実施し、その結果に基づき次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称 宿東遺跡 (29-135)

種別 集落跡

時代 縄文

所在地 日高市高萩字宿東

2 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後の協議で工事計画の変更は不可能であると判断されたため、平成6・7年度に発掘調査を実施することとなった。発掘調査の実施については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、道路建設課、文化財保護課の三者で協議した結果、平成6年4月1日から着手することになり、道路建設課において調査に要する経費が予算措置された。

発掘調査に先立ち、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく発掘通知が埼玉県知事から提出され、また、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からは、同法57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出された。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成6年7月20日付け委保第2の064号

平成7年4月12日付け教文第2-2号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成6年4月1日から平成7年12月31日まで実施した。調査面積は13,900㎡である。道路・鉄道などを境として調査区をA～D区の4区画に分けたうえで調査を行った。

平成6年度

調査区南部のA・B区の調査を行った。初年度の発掘調査面積は5900㎡である。

発掘調査は県道日高川越線の北のA区から開始された。県道に接する部分から機械による表土除去作業を行い、順次人力による遺構確認を行った。5月中旬には、ほぼA区全体の表土はぎを完了し、この時点で調査区全域にわたって住居跡・土壌など無数の遺構が存在することが明らかになった。

調査期間中を通し、遺構中から出土する多量の遺物の記録・取り上げに忙殺されることとなった。11月には縄文時代中期末葉の柄鏡形住居跡が検出され、1月には土壌覆土中からヒスイ製垂飾が出土した。

2月にはA区北西部の市道にはさまれた三角形の区域の調査を行い、遺構・遺物を検出した。また、同時に県道南のB区の表土除去を行った。調査区は瓦礫等によって盛り土されており、表土除去作業は難航した。

3月中旬までには全ての遺物を取り上げ、遺構の記録と個別の写真撮影をほぼ完了した。

平成7年度

2年目の調査はC・D区を中心に実施した。調査面積は8000㎡である。

4月早々に昨年度調査区全体の清掃を行い、補足的な記録作業と空中写真撮影を行った。これと同時に、JR川越線の北に位置するC区南半の表土除去作業を行い、5月上旬にはこの部分の遺構調査を開始した。

6月上旬には川越線の南に位置するD区の表土除去を開始、この際近隣の住宅との間に防塵ネットを設営した。D区においても、A区から連続する濃密な遺構群の存在が明らかになった。このため、7月下旬にはC区南半の空中写真撮影を実施し、調査の主力をD区

へと移動した。

10月に入ってC区北半部分の表土除去作業を行い、近世の溝等の発掘調査を開始。また、同区南端部において、川越線に平行して走る市道の迂回工事を行い、市道下面の発掘調査を開始した。C区の遺構調査は11月上旬までにはほぼ完了した。

C区北半の調査に併行してD区の防塵ネットを撤去、また、A・D区中間の市道の迂回工事を実施して、中旬にはこの部分の遺構調査を開始した。

12月上旬にD区およびC区残存部分の空中写真撮影を実施した。また、これに併せて遺跡の現地説明会を行った。その後、補足的な作業を行いつつ撤収作業に入り、12月下旬には一連の発掘調査を完了した。

整理作業

平成8年4月1日から平成10年3月31日までの2年度にわたって実施した。

平成8年度

4月から6月にかけて遺物の水洗・注記を行い、土器の復元作業に入った。復元された土器は順次実測作業に入った。

石器は剥片などを分離した後に器種ごとに選別し、全長・幅・厚さ・重量などの計測を行い、パーソナルコンピュータにより台帳を作成した。これらの作業に併行して遺構原図を整理し、第2原図を作成した。

平成9年度

6月までに遺物の復元作業を完了し、土器の破片資料の選別と拓本の採取、断面実測を開始した。

遺物の実測は継続して行い、12月までに完了した。実測図は完成したものから順次墨入れを行った。遺構図版は7月以降墨入れを行った。また、遺物の写真撮影は4月と12月にそれぞれ行った。

委託作業は7月に空中写真の合成、翌平成9年1月に黒曜石の原産地同定を実施した。

本文の執筆は年度後半を通じて行い、年明けには割り付けの作成を開始、入稿・校正を経て、3月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成6・7年度)		専務理事	吉川 國男 (H8)
理事長	荒井 桂		塩野 博 (H9)
副理事長	富田 真也	常務理事兼 管理部長	稲葉 文夫
専務理事	栃原 嗣雄 (H6)		
	吉川 國男 (H7)	理事兼 調査部長	小川 良祐 (H8)
常務理事兼 管理部長	加藤 敏昭 (H6)		梅沢 太久夫 (H9)
	荒井 秀直 (H7)	管理部	
理事兼 調査部長	小川 良祐	庶務課長	依田 透
管理部		主任	西沢 信行
庶務課長	及川 孝之	主任	長滝 美智子
主任	市川 有三	主任	菊地 久 (H8)
主任	長滝 美智子	主任	腰塚 雄二 (H9)
主任	菊地 久	専門調査員兼 経理課長	関野 栄一
専門調査員兼 経理課長	関野 栄一	主任	江田 和美
主任	江田 和美	主任	福田 昭美
主任	福田 昭美	主任	腰塚 雄二 (H8)
主任	腰塚 雄二	主任	菊地 久 (H9)
調査部		資料部	
調査部副部長	高橋 一夫	資料部長	梅沢 太久夫 (H8)
調査第二課長	大和 修		谷井 彪 (H9)
主任調査員	細田 勝	主幹兼 資料部副部長	谷井 彪 (H8)
調査員	福田 聖 (H6)		小久保 徹 (H9)
調査員	上野 真由美 (H7)	専門調査員兼 資料整理第二課長	鈴木 敏昭 (H8)
調査員	渡辺 清志 (H7)		村田 健二 (H9)
		主任調査員	細田 勝 (H8)
		調査員	渡辺 清志
(2) 整理作業 (平成8・9年度)			
理事長	荒井 桂		
副理事長	富田 真也		

II 遺跡の立地と環境

日高市は埼玉県中央部やや南、入間川左岸の入間台地上に位置する。市域は埼玉県の中央を南北に走る八王子構造線を境に、西は秩父山地、東は丘陵・台地というように地形のうえで二分される。

正丸峠に源を発する高麗川は、国道144号線に沿って山間部を東流し、市域西部の巾着田付近で平地に流れ出ると同時に、蛇行しつつ北へと向きを変え、外秩父の山際に沿って北西の坂戸台地方面へと流れ下る。

市域南西部には宮沢湖を擁する高麗丘陵が東西に長く横たわっており、高麗川右岸との間には巾着田付近を扇頂部とする高麗川扇状地が発達している。

扇頂部付近の高麗川沿岸には榎戸遺跡、鹿台遺跡等、「高麗石器時代住居跡」の名で知られる縄文時代中期の集落遺跡が点在している。

ここから高麗川が北流する現在の市街地中心部にかけての一带には奈良・平安時代を中心とした遺跡の分布が知られているが、右岸の東台遺跡からは縄文時代早期から後期にわたる遺物を出土したほか、表採資料ながら、晩期千網式の完形土器が出土している。

扇状地にあたる旭が丘地区周辺の平坦面では遺跡の分布は希薄で、高麗川右岸の自然堤防上に愛宕久保遺跡、上野ヶ谷戸遺跡（いずれも前期関山式期）、久保遺跡（中期勝坂式期）といった遺跡が分布しており、小畔川左岸の自然堤防上には平安時代の遺跡に混じって若干の縄文中期の遺跡の存在が知られている。

高麗丘陵の東に連続する高萩地区から南の一带は、台地がいくつかの小河川により開析されており、谷津の深く入り組んだ複雑な地形が展開している。これらの河川の両岸および中間の台地上には縄文・平安時代を主体とする数多くの遺跡が分布し、特に縄文時代中期においては遺跡数の爆発的な増加が指摘されている。

第2図は宿東遺跡を中心とした日高市西部地域の縄文時代遺跡の分布を示したものである。

早期の遺跡は、東山式～平坂式期の集落であり、これらに並行する押型文土器を多量に出土した向山遺跡

(10)をはじめとして、二反田遺跡(7)からは押型文～沈線文系の土器が出土、また、早期末～前期初頭と思われる縄文+条痕の土器を出土する住居跡が検出された。長山甲遺跡(5)でも押型文～沈線文系の土器が出土している。向原遺跡(12)からは早期後半の炉穴群が検出された。

この地域における前期の遺跡は、破片レベルでの出土を別にすれば希薄である。唯一、高麗川扇状地扇状部の嘶遺跡(25)が諸磯式期である。

先にも述べたとおり、中期には一帯で爆発的な遺跡数の増加が認められる。小畔川流域においては中期末葉の柄鏡型住居跡を検出した稻荷遺跡(24・23)、加曾利E式期の白幡遺跡(22)が挙げられる。上猿ヶ谷戸遺跡(4)は隣接する川越市の光山遺跡と一続きの遺跡であり、両遺跡を通じて6基の陥し穴を検出した。

下小畔川流域では西不動遺跡(3)、宮ノ後遺跡(2・3)が加曾利EⅡ式期、上流の西仏遺跡(20)が勝坂～加曾利E式期の集落遺跡である。また、今回発掘調査された宿東遺跡(1)は小畔川と下小畔川にはさまれた台地上に位置し、加曾利E式期～後期の遺構・遺物が出土した。

第2小畔川流域では勝坂式の集積群を検出した宿方遺跡(14)が存在するほか、谷津前遺跡(16)、東方遺跡(15)が中期とされる。

南小畔川流域では二反田遺跡、上原遺跡(11)、向原遺跡(12)等が加曾利E式期を中心とするまとまった規模の集落として知られ、向山遺跡からも加曾利E式期の住居跡が検出されている。

後期の遺跡としては向原遺跡(12)から称名寺式～堀之内式期であるほか、寺脇遺跡(17)、下宿遺跡(13)、西ノ久保遺跡(6)等が後期とされる。宿東遺跡からも称名寺段階に下る住居跡・土壇が検出されているが、全体に低調で、後期初頭を境とする集落遺跡の占地の変化が想定される。今後、高麗川扇状地の周辺で同時期の遺跡の増加してゆくことが考えられる。

Ⅲ 遺跡の概要

宿東遺跡は埼玉県日高市大字高萩字宿東1662番地3他に所在する。JR川越線武蔵高萩駅から約700m東に位置しており、さらに東に500mあまりで川越市との境界に至る。

遺跡の乗る台地は北を宮沢湖に水源を持つ小畔川、南を小畔側の支流の下小畔川によって開析された小支谷に面している。台地の北縁部分はきわめて緩やかな傾斜を経て小畔川の河床に至る。これに比べ台地南縁は等高線の間隔が詰まっており、部分的に崖線となっているが、基本的にはやや急な斜面を経て南小畔川の河床へと至っている。

台地縁辺はこれら2つの支谷から入り込む小谷によってさらに開析され、それらのうちの1つが調査区北端にも入り込んでいる。遺跡周辺の標高は約54~58m前後を測る。

台地は遺跡周辺から南西方向へと向きを変え、緩やかに傾斜し、さらに300mあまり続く。遺跡の範囲は約125,000㎡と推定されており、遺跡の北縁と東縁は、ほぼ標高55mの等高線付近を巡っている。遺跡の西側

には南の下小畔川から谷地形が深く入り込んでおり、これが集落の西端を区画しているものと思われる。

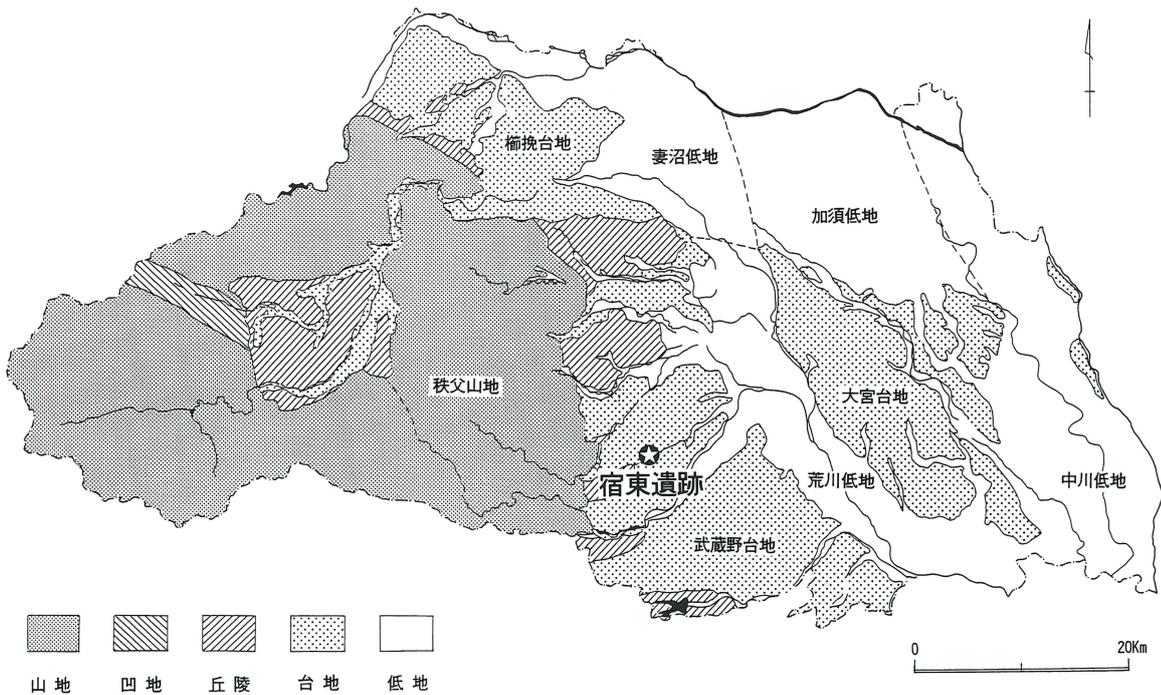
宿東遺跡はこれまでに日高市教育委員会による10次の調査が行われており、中期後葉から後期初頭にかけての遺構・遺物類を出土している。今回の調査は第11次の調査にあっている。

今次調査区は遺跡のほぼ中央を南北に縦断するもので、計画当初から縄文時代中期を中心とした遺構・遺物の出土が見込まれていた。最終的な遺構軒数は次のとおりである。

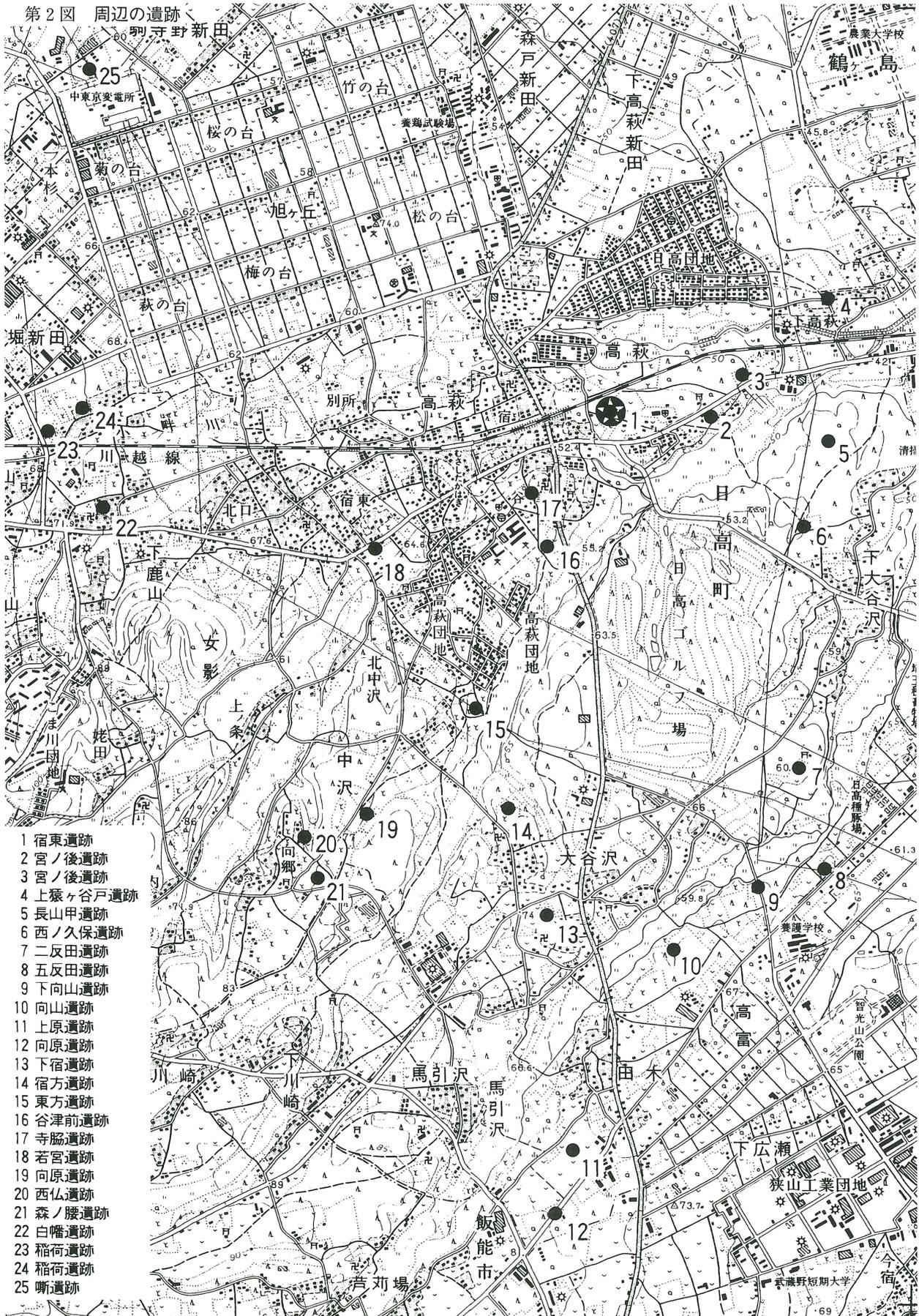
- 住居跡 ……160軒
- 住居跡状遺構 ……1軒
- 掘立柱建物 ……5軒
- 土壇 ……239基
- 配石遺構 ……1基

遺跡は道路・鉄道などを境として便宜上A区からD区までの4つの区域に区分され、個別に調査を行った。それぞれの区域ごとの状況は、各章の冒頭において概説しているため、ここでは4つの調査区全体における

第1図 埼玉県の地形

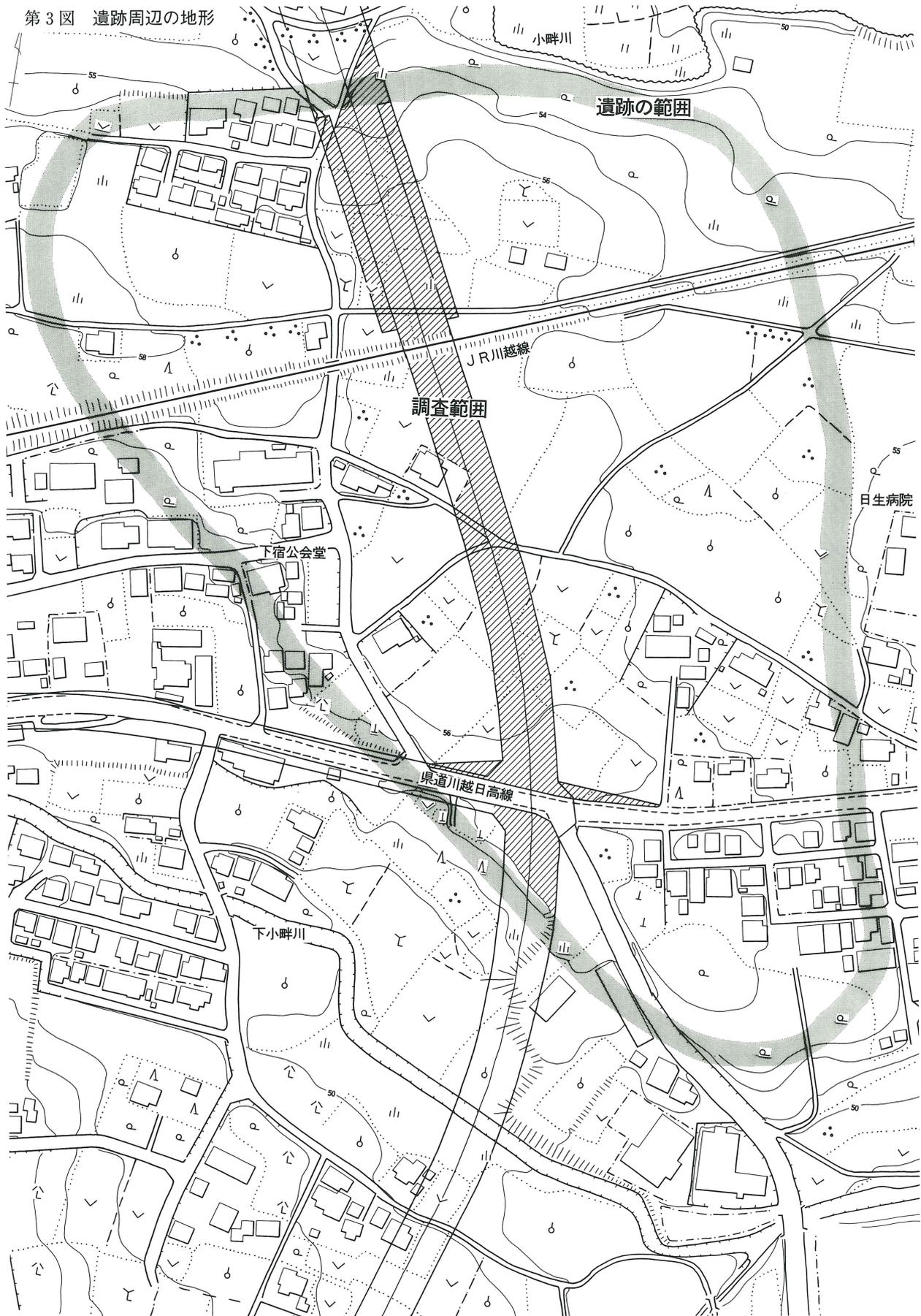


第2図 周辺の遺跡



- 1 宿東遺跡
- 2 宮ノ後遺跡
- 3 宮ノ後遺跡
- 4 上塚ヶ谷戸遺跡
- 5 長山甲遺跡
- 6 西ノ久保遺跡
- 7 二反田遺跡
- 8 五反田遺跡
- 9 下向山遺跡
- 10 向山遺跡
- 11 上原遺跡
- 12 向原遺跡
- 13 下宿遺跡
- 14 宿方遺跡
- 15 東方遺跡
- 16 谷津前遺跡
- 17 寺脇遺跡
- 18 若宮遺跡
- 19 向原遺跡
- 20 西仏遺跡
- 21 森ノ腰遺跡
- 22 白幡遺跡
- 23 稻荷遺跡
- 24 稻荷遺跡
- 25 嘶遺跡

第3図 遺跡周辺の地形



遺構、とりわけ各時期の集落景観を決定づけるであろう住居跡と掘立柱建物跡を中心に、集落の変遷の大きな傾向を押さえておくことにする。

住居跡はA区において奈良時代の竪穴住居跡が1軒検出された他は、すべてが縄文時代のものと考えられる。調査区全体を覆う攪乱により、遺構の保存状態は概して悪く、遺物を全く伴わないものも少なくなかったが、包含層中の遺物の時期等を勘案しても、住居跡群の時期は縄文時代中期後葉の加曽利E I式から後期初頭の称名寺式、新しく見積もっても後期前葉の堀之内II式までの間に収まるものと考えられた。

加曽利E I式期の住居跡は、南北に長い調査区の南端と北端に分かれて検出された。A区・D区といった台地中央部からはほとんど検出されず、1軒から数軒単位の小群が台地縁辺を巡るようして散在するような居住形態が想定される。この時期を集落変遷上の第I期とする。

加曽利E II式期には、A区北西部への住居跡群の著しい集中がみられた。遺跡の中央やや南寄りのこの一角は、遺跡南西部に入り込む谷の東縁にもあたっている。

日高市教育委員会による調査では加曽利E I式後半～II式期の住居跡群がここからさらに西北西、下宿公会堂の付近まで延びてゆくさまが観察されており、南向きの谷沿いの平坦地に集落の中心らしきものが形成されたことがうかがわれる。この時期を集落変遷上の第II期とする。

中期末葉に掛かる加曽利E III式期になると、住居跡群は南の谷筋を離れて、台地の中心部に近いD区南端部を主体として著しい重複を見せるようになる。A区

東半部分はとみに遺構の保存状態が悪く、壁の残存する住居跡がほとんど存在しない状態であったが、かろうじて検出された炉跡・埋甕等の時期から、この部分にも加曽利E III式期の住居跡が存在していたことが確実であり、集落域は谷を巡る前段階の住居跡群の外周へと移動したことが考えられる。この時期を集落変遷上の第III期とする。

さらに、これは中期末葉に限って言えることだが、1軒から数軒単位の住居跡小群の存在が再び顕在化する。これらはA区南半、D区北半など、同時期の遺構集中区域を遠巻きにするようして分布している。集中区のものとは比べ、住居形態・出土遺物等に際立った違いはみられない。

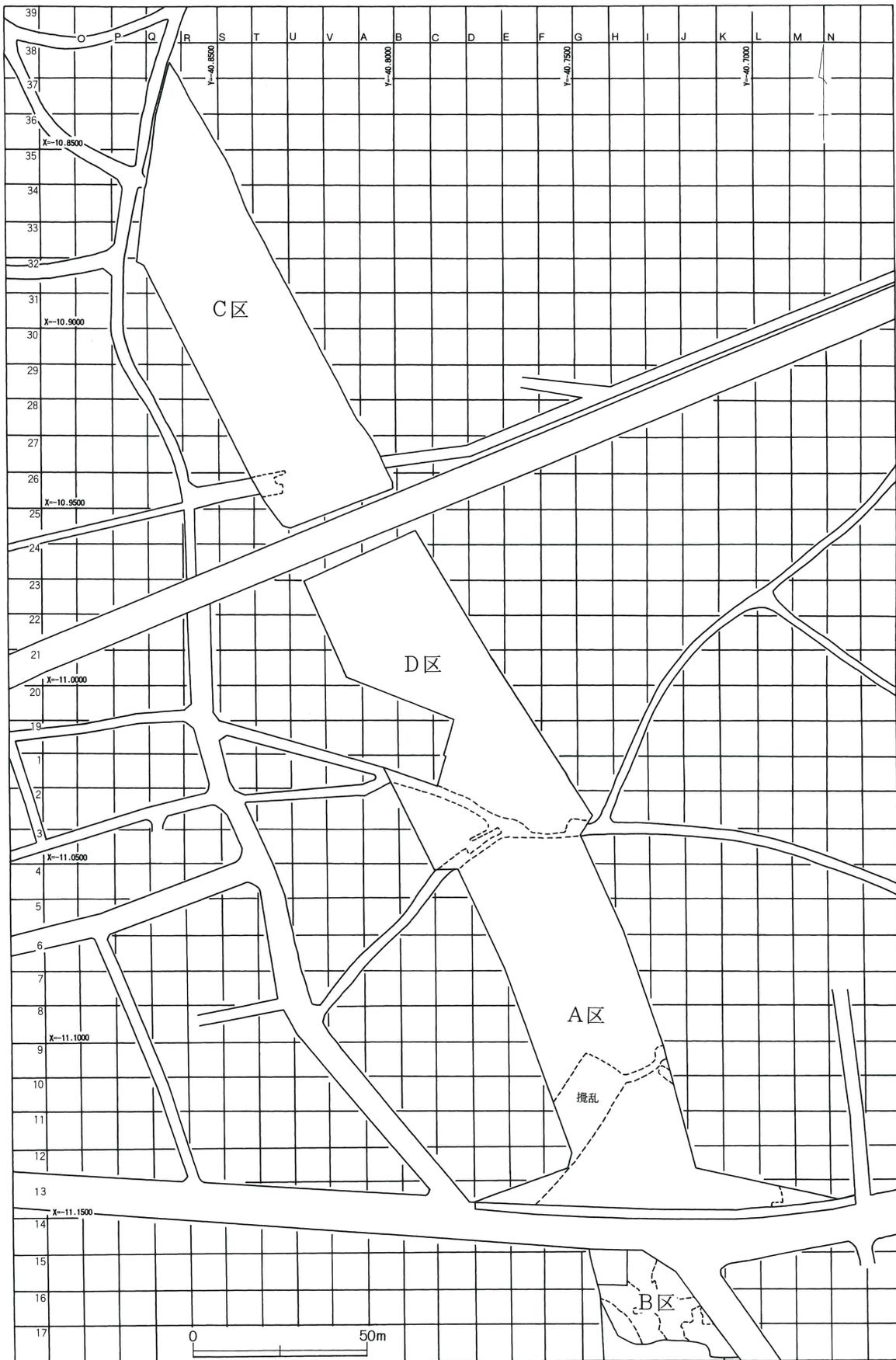
縄文時代中期後葉～後期初頭における大規模集落の、成立期直後および衰退期前夜にあって、こうした住居跡小群の存在が顕在化している事実には注意しておく必要があるように思われる。

集落は後期初頭以後、数軒の住居跡および土壌を残すのみで終焉を迎える。これを集落変遷上の第IV期とする。

掘立柱建物はA区北半からD区南半にかけて5軒が検出された。建物群の時期を特定することは難しいが、周辺に第I期の遺構は存在せず、また中期末の遺構に切られることから、第II期から第III期の間に収まるものであろう。

建物群の占地は、第II期の集落からみると外縁、第III期の集落における内周にあたっている。いわば二つの時期の遺構群の境界線上に位置していると言えるだろう。

第4図 調査区およびグリッド配置図



IV A区の調査

1. 調査の概要

A区は初年度の調査の中心となった地点であり、今回の調査を通じて最も多数の遺構と遺物が出土した。北は、市道をはさんでD区に接し、南は県道川越日高線をはさんでB区に接している。

原耕作土を取り除くとまもなく遺物が出土し、黒褐色の遺物包含層を経て遺構検出面に至っている。遺構同士の激しい切り合いに、植栽やトレンチャーによる攪乱も加わって、遺構の検出は困難を極めた。

遺構はグリッド上の4～9ラインにおいて顕著な集中がみられ、ほとんど切れ目無しにD区南半の遺構群へと連続してゆくものとみられる。

調査区南半部では特に住居跡の分布がうすくなってゆくが、これは必ずしも集落自体の切れ目ということだけではなく、耕作や造成などによる遺構上面の削平、とりわけこの部分に縦横に走るトレンチャーの攪乱により遺構の検出が不可能となったことも、原因の一つとして考えられよう。

A区において検出された遺構の種類および数は、住居跡90軒、住居跡状遺構1軒、掘立柱建物跡4棟、土壇193基、埋甕8基であった。これらの遺構のうち堅穴住居跡1軒が奈良時代のもので、それ以外は基本的に縄文時代中期後葉から後期初頭に属するものである。遺物の出土しない土壇についても覆土の状態などが縄文時代の遺構に共通しており、極端に新しい時期のものは存在しないものと思われる。

先に挙げた遺構数は調査・整理の各段階における変更を経た最終的な数字である。その際、抹消・統合などによって生じた欠番はそのままに残しており、ナンバーの繰り上げは基本的に行っていない。遺構の最終ナンバーと総数とが一致していないのはこのためである。

住居跡は明確な掘り込みが確認されたもの(第5図)のほかに、遺構検出面において炉跡・埋甕・柱穴などが検出されたもの(第6図)も多い。後者も原状は堅

穴住居跡であったものだが、遺構上面の削平によって壁を失ったものと考えられる。

炉跡すら検出されない、柱穴と思われるピットの配列のみに頼って遺構の認定を行ったものも少なからず含まれており、規模・平面形など不確定の要素も多いが、本報告においては発掘調査時点の判断を最大限尊重した。

遺構の時期については、壁を残すものは中期後葉の加曾利E I式から後期初頭の称名寺式段階まで、集落の全時期にわたっている。一方壁を残さないものについては、埋甕・炉体土器などにより時期の特定されるものは中期末葉から後期初頭にはば限定される。

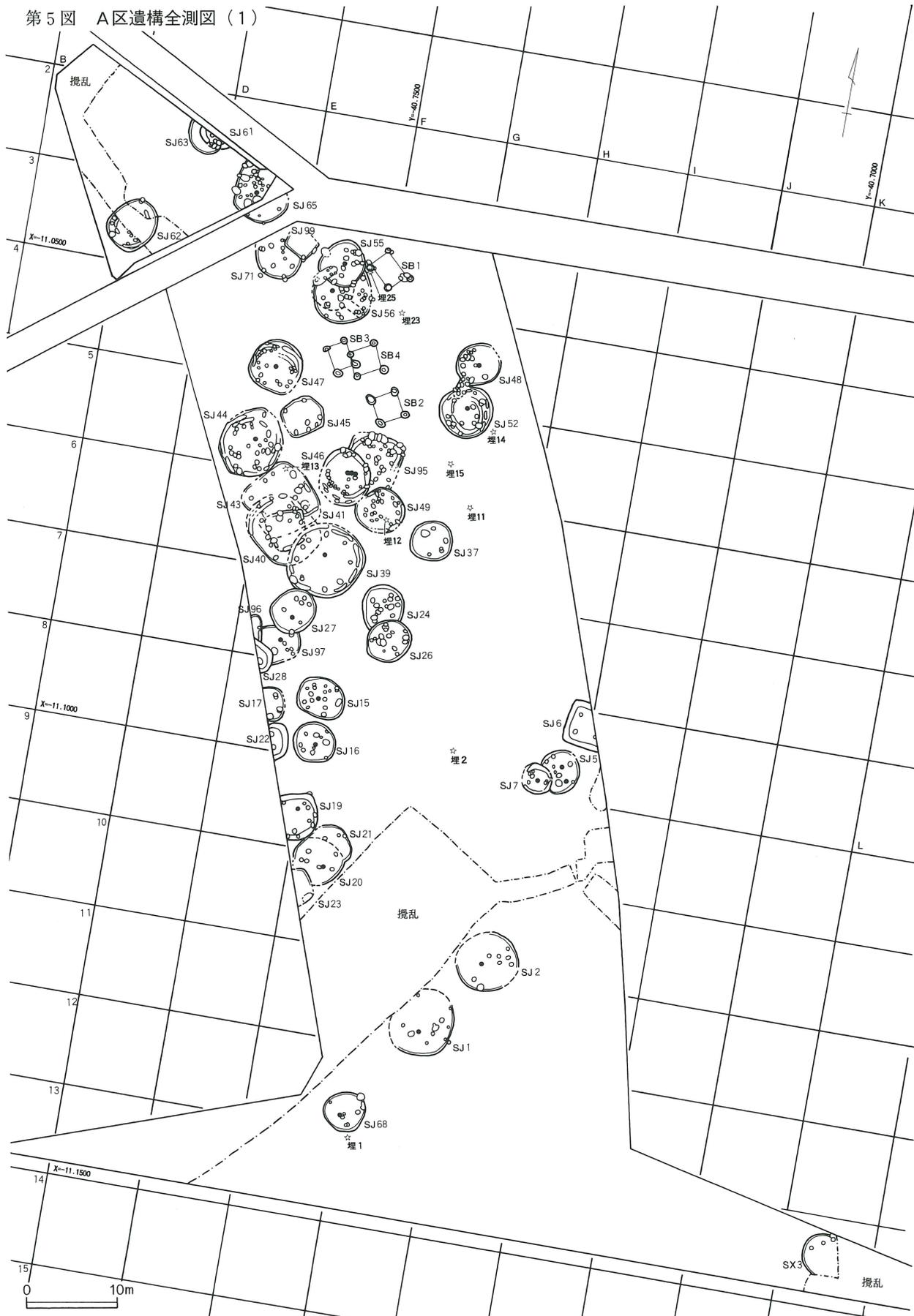
集落の中心はD区南端からA区の北西およびこの方面の壁外、グリッドで言うところB～F、1～8付近に存在する可能性が高く、A区に関する限り時期の古い住居跡は集落のより内周に分布しているものとみられる。

掘立柱建物跡(第5図)はE・F-3～5区に集中する。今回、他の住居跡等の柱穴に比べ規模の点で明らかに異なるものについて別種の建造物として認定した訳だが、むしろより小規模な柱穴によって構成される建物も存在したことが予想される。

土壇(第7図)は調査区全域に分布しているが、やはりD～F、4～6といった北西部の一角に集中しており、住居跡の分布密度とよく似た傾向を示している。時期は後期初頭の土器を出すものが1基存在するが、それ以外は中期後葉から末葉に属するものである。

埋甕(第5図)は第27号までカウントされたが、抹消や住居跡への編入などにより欠番が生じ、最終的に8基が残った。詳しくは本文を参照してほしい。埋甕は調査区全域に分布する。大多数が3～6といった北半のラインで検出されており、その点では他の遺構の分布状態と特に変わることはない。時期は中期後葉から末葉までの範囲に収まるものと思われ、これも他の遺構と変わらない。

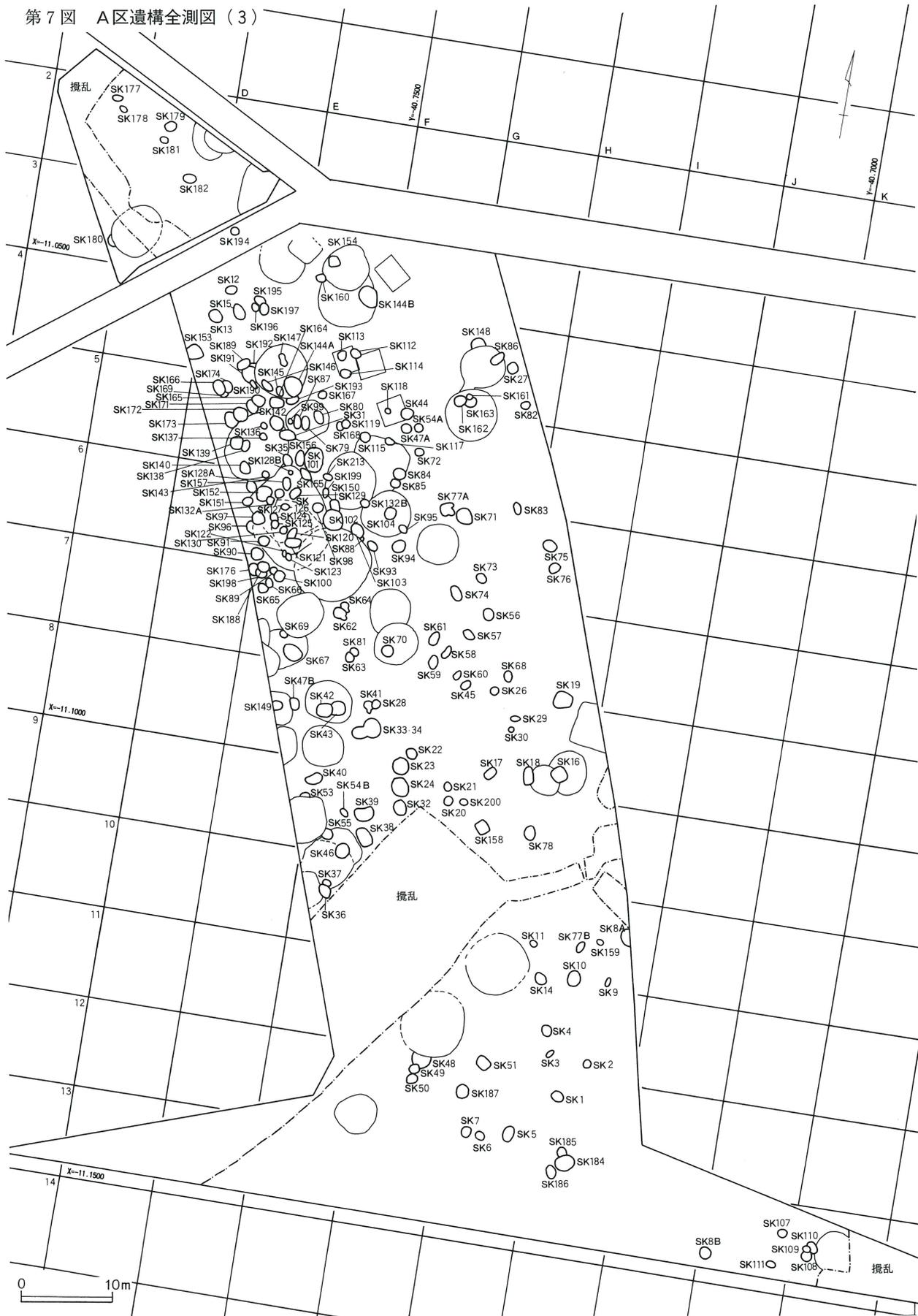
第5図 A区遺構全測図(1)



第6图 A区遺構全測图(2)



第7図 A区遺構全測図(3)



2. 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

A区第1号住居跡(第8図～第11図)

G-11区に所在する。住居跡北壁から西壁にかけてひろくトレンチャーによる攪乱によって破壊されているため、正確な規模・形状は不明だが、長径7.5m、短径約6.5mであり、ほぼ楕円形の住居跡であると思われるが、南壁中央でやや直線に近くなる。壁高は最も残りの良い部分でも13cm程度である。主軸方向は不明である。床面上の10カ所でピットを検出したが、いずれも深さ15cm未満の皿状の掘り込みであり、柱穴とは認定し難いものである。

床面はほぼ平坦で、わずかに南西へと傾斜している。平面図には図示しなかったが、広い範囲にわたってトレンチャーによる攪乱がみられた。

炉跡は主軸線上の南寄りに位置する。北西コーナーの一部を除いてトレンチャーの攪乱によって破壊されているが、隅丸方形を呈するものと思われ、炉跡が本住居跡の垂直二等分線上に位置するものと仮定するならば、その規模は一辺6～70cm程度であると考えられる。検出された状態は地床炉であったが、北壁の一端に長径16cm大の河原石を敷設しているため、本来石囲炉であった可能性もある。炉床は部分的に被熱による赤変がみられた。

遺物は炉跡の上面を中心とする覆土南半から多く出土している。いずれも縄文時代中期後葉から末葉にかけての土器であり、少量の石器も出土している。

出土土器(第10図・第11図)

1はキャリパー類の小形深鉢である。胴部中段に緩いくびれを持ち、ここから口縁に向かって直線的に開き、口縁直下で「く」の字に内屈する。胴下半部を欠失し、現存高18.5cm、口径24.6cmを測る。口縁に隆帯による6単位の繫弧文を巡らせ、これによって生じた半月形の区画内部には縦位の短沈線が充填される。繫弧の接点には渦巻モチーフがやや上向きに配される。頸部は幅広の無文帯を構成し、胴部との境界は三本沈線によって横位に区画される。胴部文様は大半が失わ

れているが、二本沈線による唐草文モチーフが4単位展開するものと思われ、口縁部文様帯の単位構成とは明らかなずれを生じている。胴部の地文はRL単節の縄文が縦位に施文される。

2は小形の深鉢で、連弧文の系譜に連なるものと思われる。口縁部の大半を欠失する。底部から口縁にかけて直線的かつ緩やかに開く器形で、口縁部で軽微な段をなす。口縁は4単位の小波状をなすものと思われる。現存高22.5cm、口径23cm、底径9.6cmを測る。

口縁直下に3本一組の沈線を巡らせ、又胴部中段を同様の三本沈線によって上下二段に分帯する。上段の区画内には2本一組の波状沈線が垂下する。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

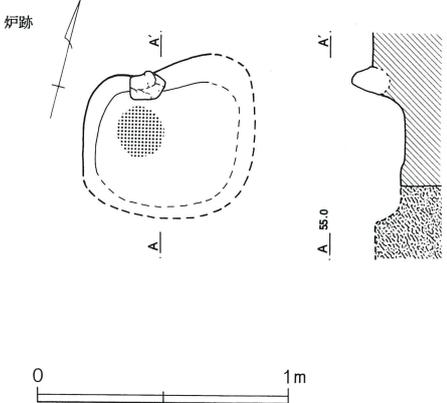
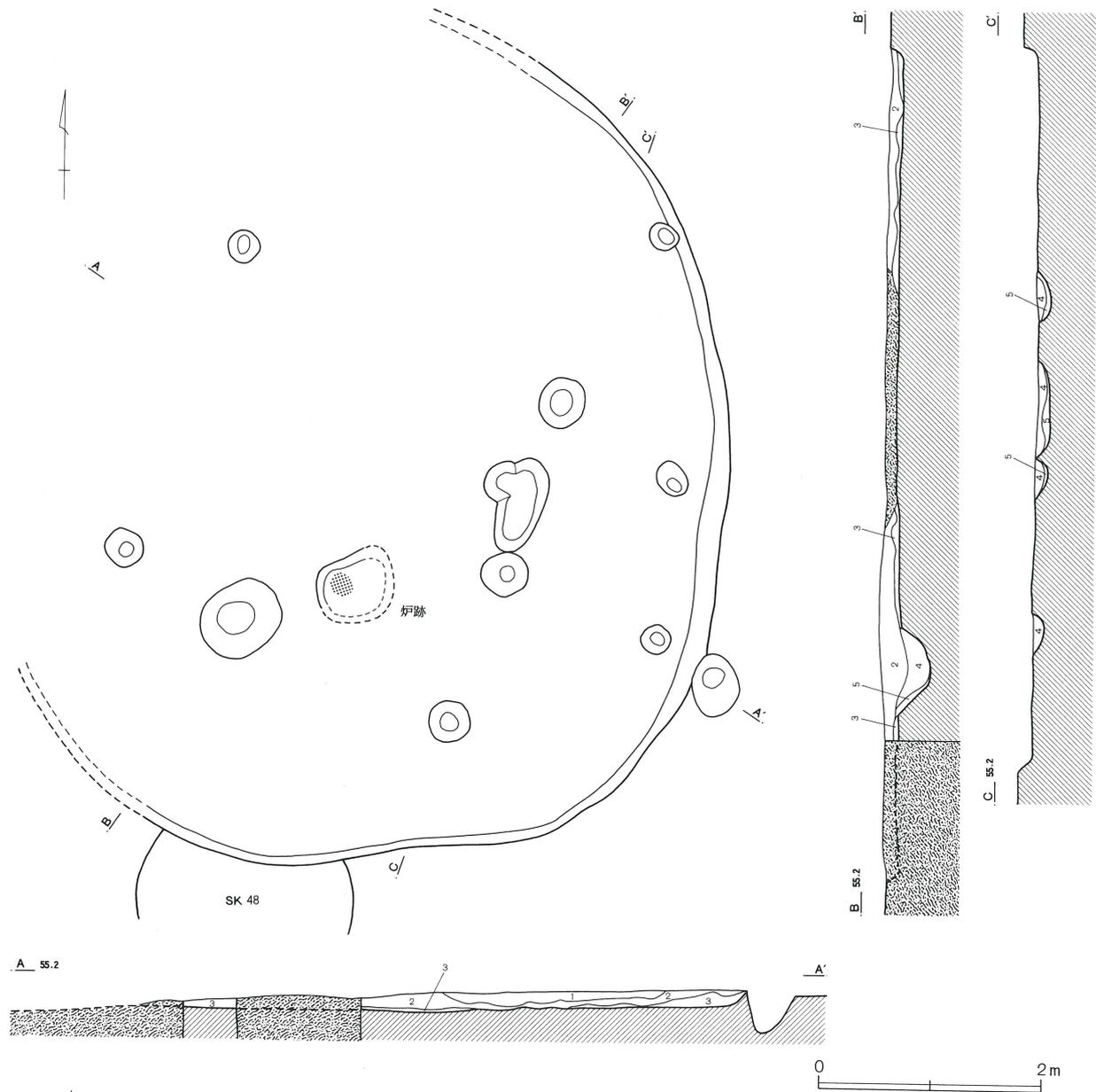
3は連弧文系の大型深鉢の胴部破片である。現存高25.1cm、復元最大径40.8cmを測る。

胴部中段にくびれを持ち、この部分に3本一組みの沈線を巡らせ、文様帯を上下に区画する。沈線間に半裁竹管状工具による爪形文が施される。連弧文は4本一組の沈線によって描かれるが、モチーフ上端部は三本沈線による横帯区画から完全に分離している。また、下2本の沈線は完全な弧を構成せず懸垂文化し、Y字のモチーフを構成している。胴上半部の連弧文もやはり部分的に懸垂文化し、胴中段の区画線へと連結するものと思われる。地文は櫛歯状工具による条線である。

4は内屈する口縁で、曽利系の深鉢である。縦位の浮線が密に施され、棒状工具によるなぞりが加えられる。5は深鉢胴部で緩いくびれを持ち、この部分に横位の隆帯が巡る。隆帯から上は窓枠状の区画を構成し、内部に沈線による幾何文が描き込まれる。6～12はキャリパー類の口縁部文様帯である。なぞりを加えた二本隆帯による渦巻文・十字文などが横位に展開する。

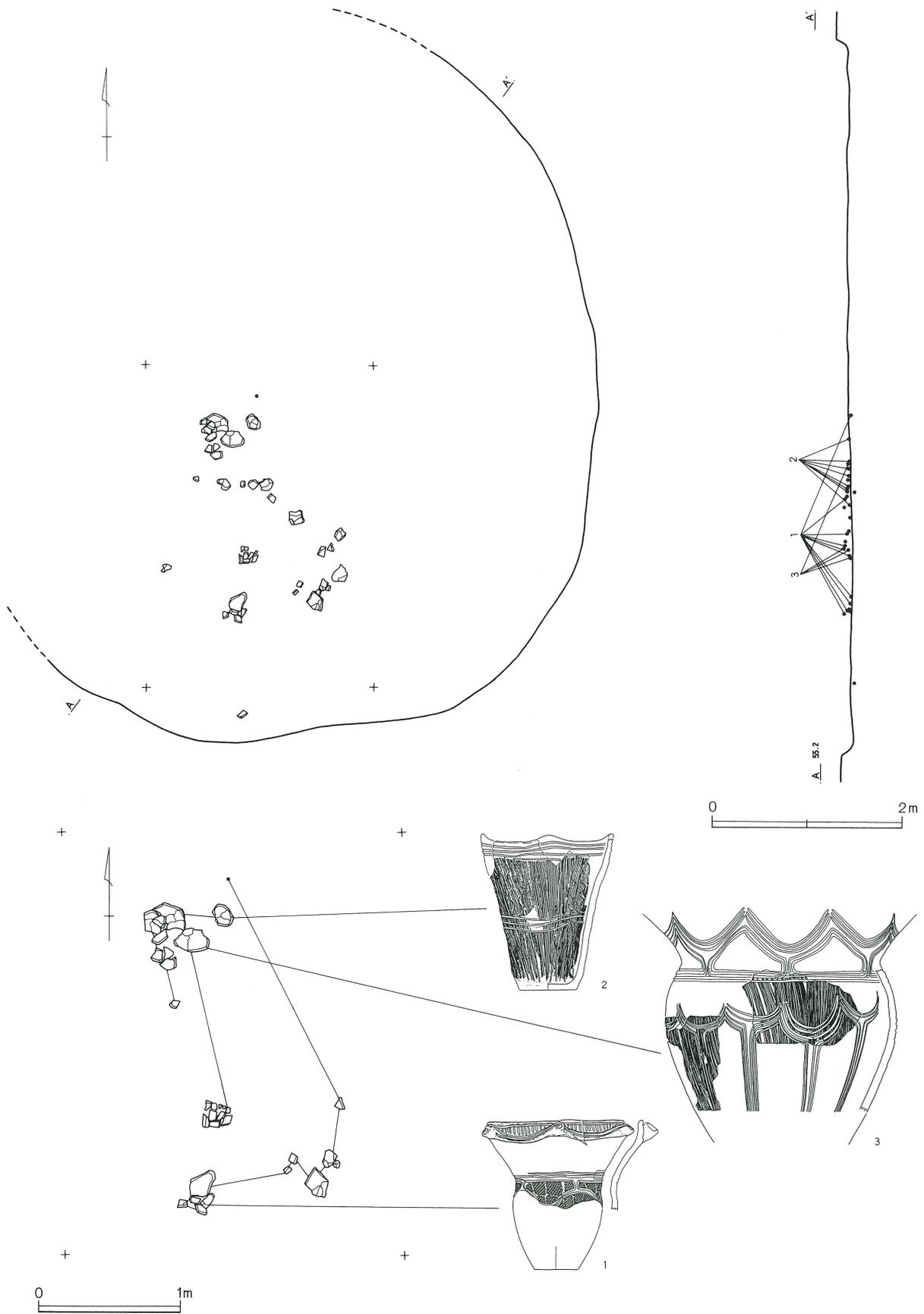
13～18は同様の土器の胴部破片である。13は頸部と胴部を隔てる区画部分で、かなり強い屈曲を持ち、横位の沈線+隆帯が多段に巡らされる。14・15は隆帯による懸垂文で、前者は撚糸文、後者は単節縄文を地文

第8図 A区第1号住居跡

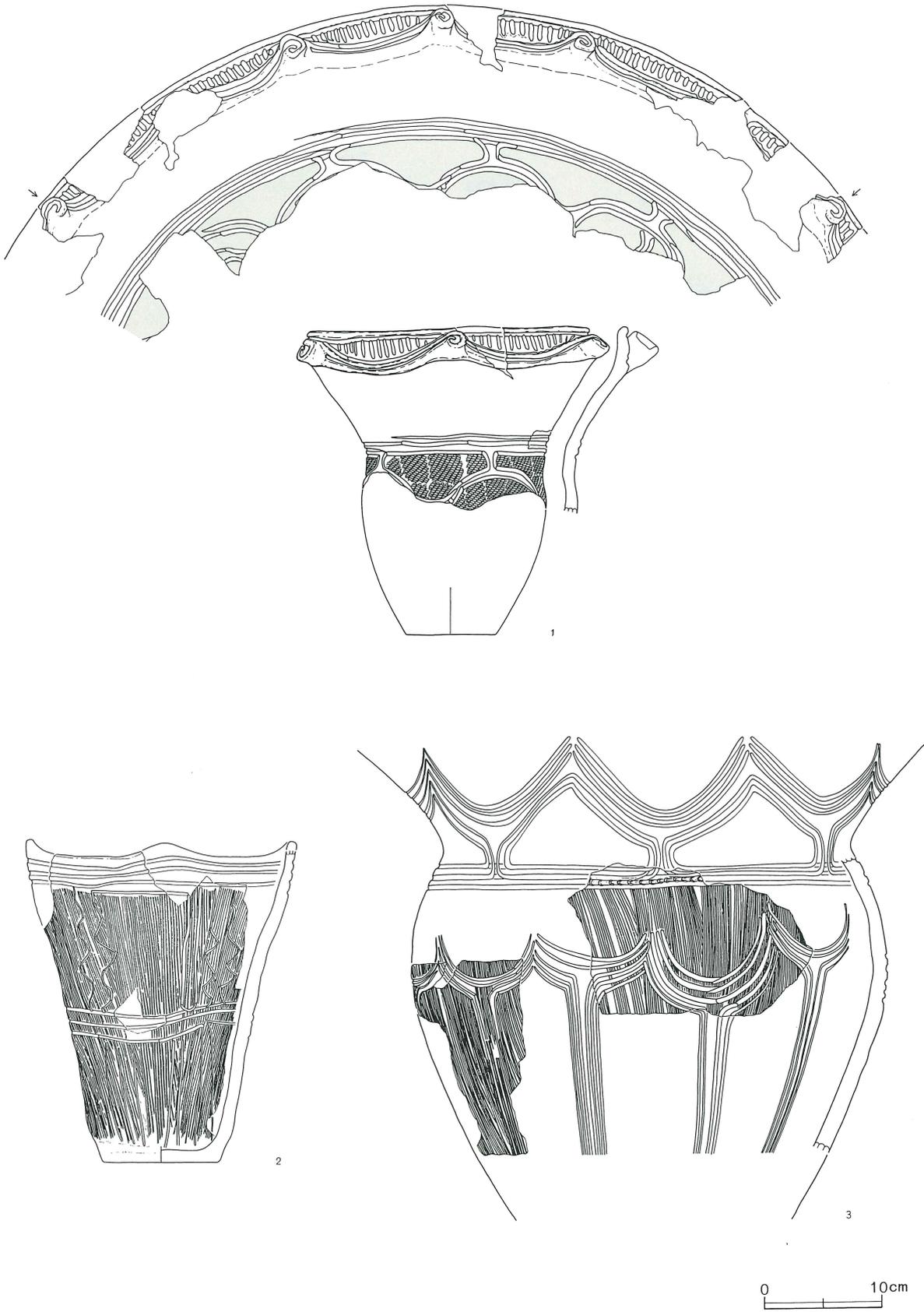


- A区S.J 1
- 1 暗黄褐色土 : ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む 締まり・粘性強
 - 2 暗灰褐色土 : ローム粒子・炭化物・焼土粒子含む 締まり・粘性弱
 - 3 暗黄褐色土 : ローム粒子多く含む 1層と混土進み、斑状となる 締まり強、粘性やや強
 - 4 暗灰黄褐色土 : ローム粒子多く含む、炭化物含む 締まり強、粘性やや強 S.J 1に伴うビット覆土
 - 5 明黄褐色土 : ローム質の壁崩落土 締まりやや強、粘性強

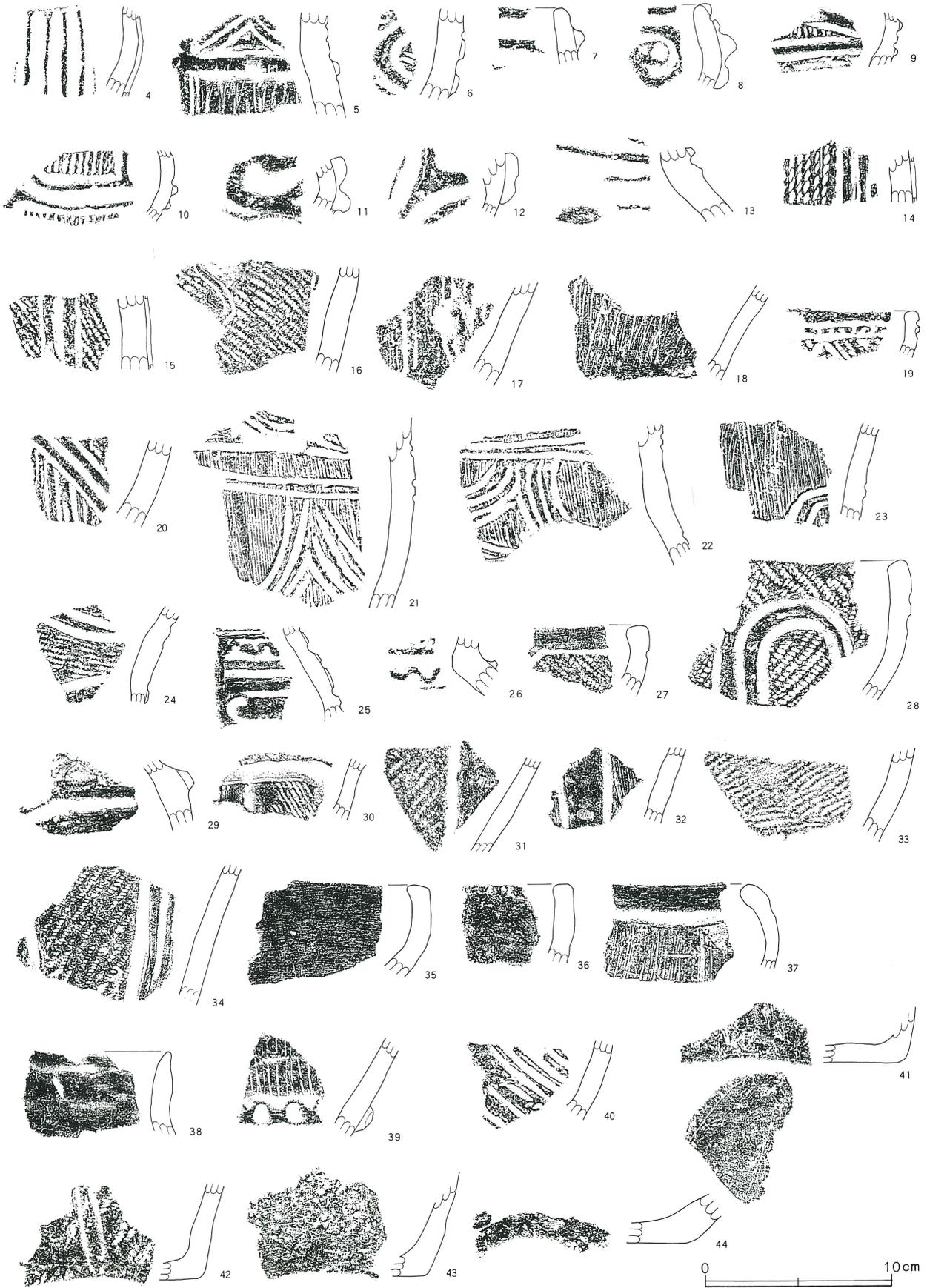
第9图 A区第1号住居跡遺物分布图



第10图 A区第1号住居跡出土土器(1)



第11图 A区第1号住居迹出土土器(2)



に持つ。16・17は半裁竹管状工具による懸垂文である。蛇行懸垂文と懸垂文が交互に配置される。地文は前者が単節縄文、後者は櫛歯状工具による条線である。18は半裁竹管状工具による条線のみが施文される。19～24は連弧文系の土器群である。19は口縁部で、口唇直下に平行沈線が巡る。沈線間には交互刺突が加えられる。21～23は櫛歯状工具による条線を地文に持つ。21と22は同一個体であるかも知れない。24は磨消し連弧文で、他より時期の下る可能性が高い。なお、20は磨消し連弧文の一種として本郡に含めたが、棒状工具による集合沈線を地文に持つ点、同様の工具による直線的で力強い文様描写など、むしろ唐草文系の文様の一部とみるべきか。25・26は胴部がソロバン玉状に張り出し、口縁外屈する鉢形土器である。なぞりを加えた隆帯が重畳し、また交互刺突文がみられる。

27は口縁部で、細沈線による楕円区画内に単節縄文が施文される。口唇は平坦で、内側にやや突出する。28は吉井城山類の口縁である。逆U字状の磨消しモチーフに隣り合ってわらび手状の沈線が描かれる。29は隆沈線による口縁部区画の一部である。30も同様の区画の一部で、これに磨消し懸垂文が連結する。31・32・34も磨消し懸垂文である。33は単節縄文のみ施文される胴部で、鉢ないし両耳壺であろう。

35～37は浅鉢口縁部である。37のみ口唇直下に沈線が巡らされ、櫛歯状工具による条線を地文に持つ。38は両耳壺の口縁である。39は曾利系の隆帯文土器で、北関東を中心に類例が知られる。40は棒状工具による重弧文で、唐草文の系譜を引くものであろう。

41以下には底部破片を一括した。浅鉢である44以外は深鉢底部である。42は地文縄文上に半裁竹管状工具による懸垂文が描かれる。

A区第2号住居跡（第12図～第16図）

H-10・11区に所在する。南東壁の一部と、北西壁の大半をトレンチャーの攪乱によって破壊されるが、長径約6.5m、短径約6mの不整楕円形の住居跡であったものと思われる。主軸方向は不明である。床面は若干の起伏を帯びており、炉周辺で深さ22cmを測るが、

壁に近付くにつれて緩やかに立ち上がり、壁高は最も残りのいい部分で15cmである。

ピットは9本が検出されたがいずれも浅く、支柱配置などは明らかでない。床面ほぼ中央に炉跡を検出した。やや小振りの方形石囲炉で、長径52cm、短径30cmを測る。径20～30cm前後の河原石を用いて炉の三方を囲う。西辺のみ石材を欠くが、この部分からは炉石埋設の際の掘り方と思われる小ピットが検出されているため、炉石は本来、全周していたものと考えられる。炉跡の規模・形態は中期末葉の柄鏡形住居跡の炉形態を想起させるものだが、調査段階ではそれに伴う張り出し部も埋甕も検出できず、確証は得られなかった。遺物は炉周辺を中心に出土している。縄文時代中期末葉の土器が主体であるが、欠損品も含め7点の石鏃の他、少量の石器も出土している。

出土土器（第14図～第16図）

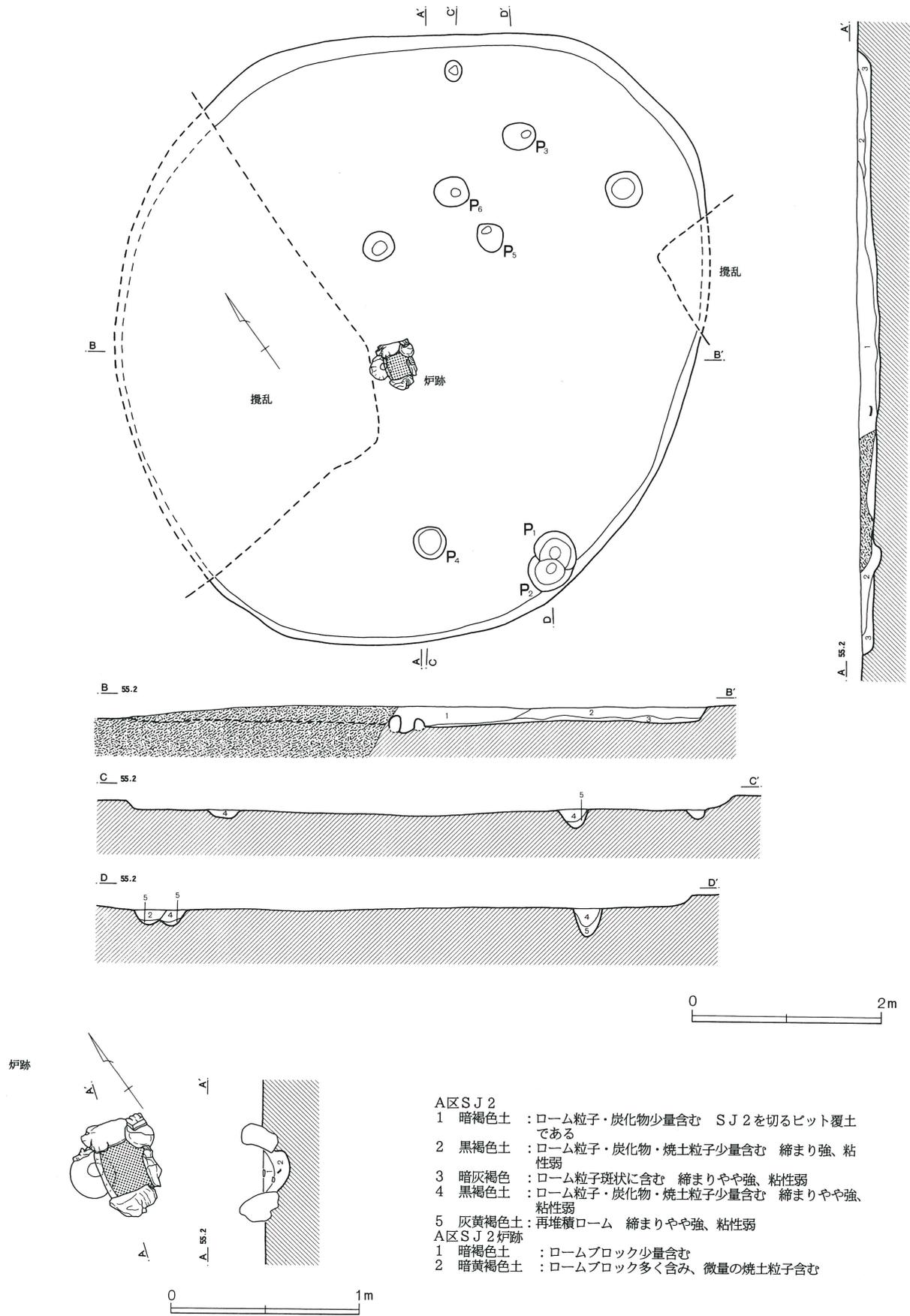
1はキャリパー類の口縁から胴上半部にかけての大破片で、隆帯渦巻を伴う口縁部区画と磨消し懸垂文がみられる。口縁部区画は弧状の隆帯が入り組みつつ横位に連続するもので、明らかに繫弧文の系譜を引いている。地文は太さの異なる縄を撚り合わせた単節縄文で、口縁部・胴部とも縦位に施文される。現存高10.0cm、口径推定24.0cmを測る。2は深鉢口縁部で、櫛歯状工具による条線のみが施文される。現存高8cm、口径推定21.0cmを測る。

3～5は勝坂式である。3にはキャタピラ文がみられる。4・5は隆帯による窓枠状の区画の一部と考えられる。

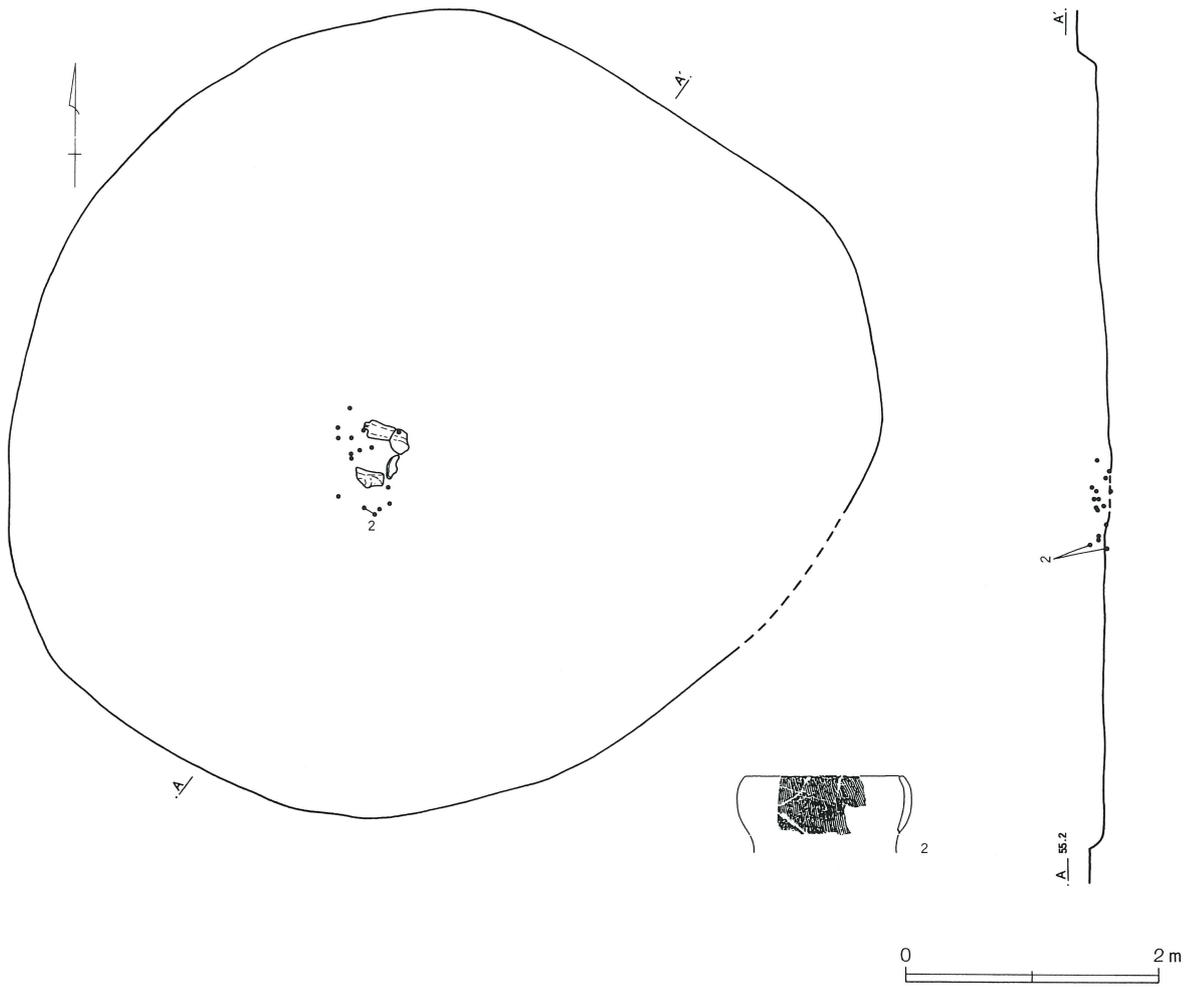
5～8はキャリパー類の深鉢口縁部周辺である。8は頸部無文帯がみられる。9はやはりキャリパー類の頸部で、胴部との境を隆帯によって区画する。10は連弧文系の深鉢である。11の口縁は半裁竹管状工具による平行沈線により楕円形の区画が描かれる。12・13は胴部がくの字に張り出す浅鉢の胴部である。隆帯上に12は円形刺突、13は半裁竹管による2個一組の刺突が連続的に施される。

14～16はキャリパー類の口縁部破片で、隆沈線によ

第12図 A区第2号住居跡



第13図 A区第2号住居跡遺物分布図



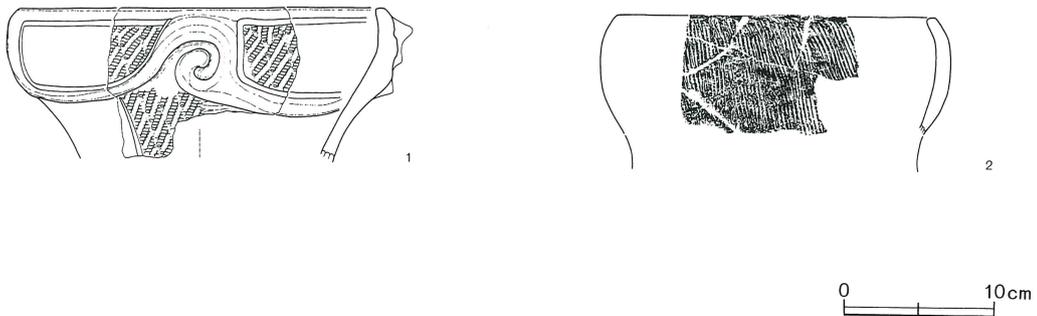
る口縁部区画がみられる。14は口端上に小突起を配するものである。17は口縁下に1条の沈線が巡り、それ以下に単節縄文が施文される。18～22は口縁部文様帯の一部である。22は両耳壺であるかも知れない。

23は吉井城山類の口縁である。磨消し縄文により逆U字状の懸垂文が描かれる。24は玉抱き状のモチーフ

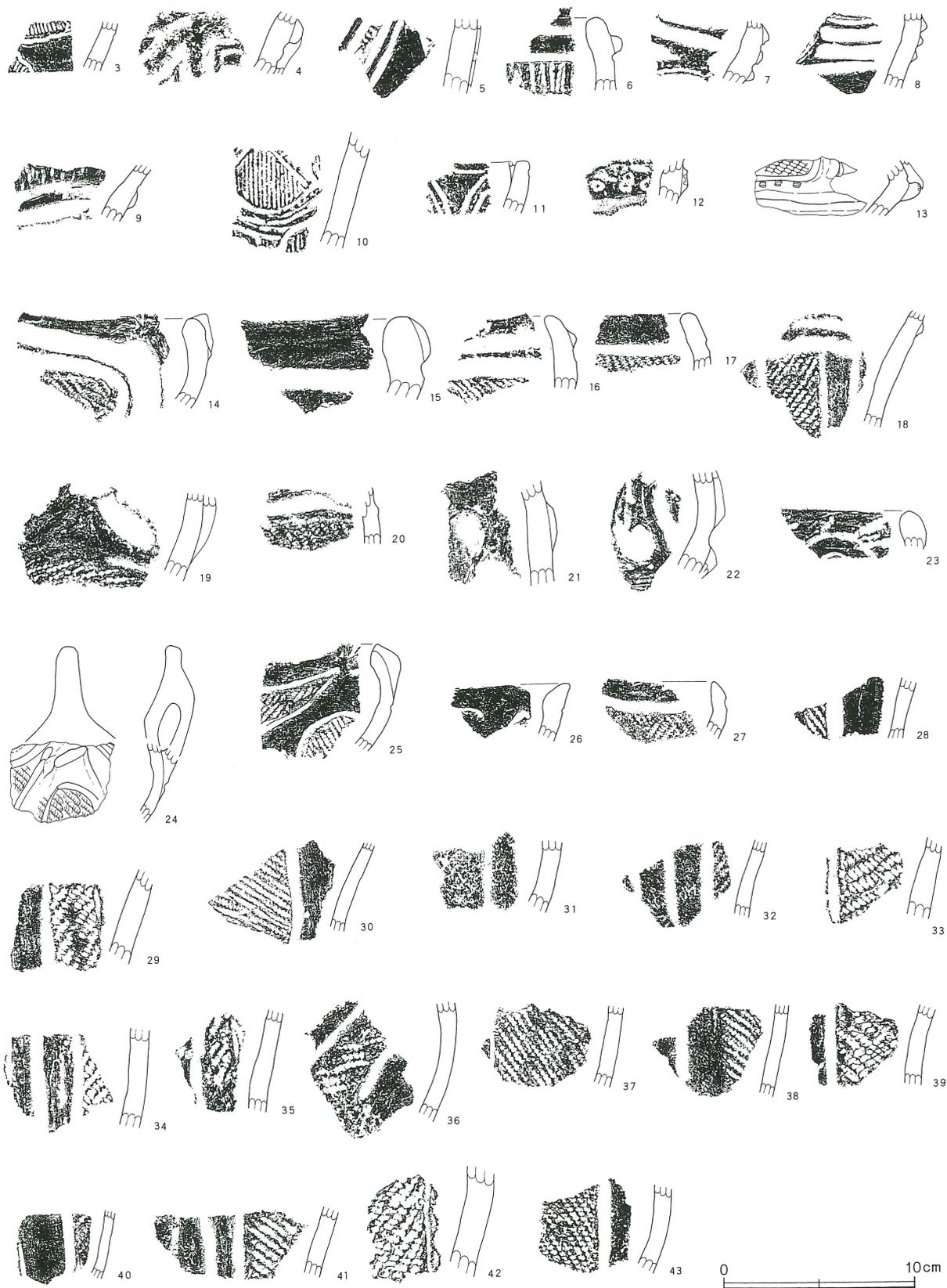
の一部がみられる口縁で、橋梁状の把手が付される。25は24と同様のモチーフが描かれる口縁で、波状口縁の波頂部につまみ出しの小突起が付される。

26の口縁は細手の沈線文様が描かれる。口唇断面内削ぎ状で、軽微に外反する。27は内反する口縁で、口縁直下を区画する沈線と縄文のみがみられる。28～43

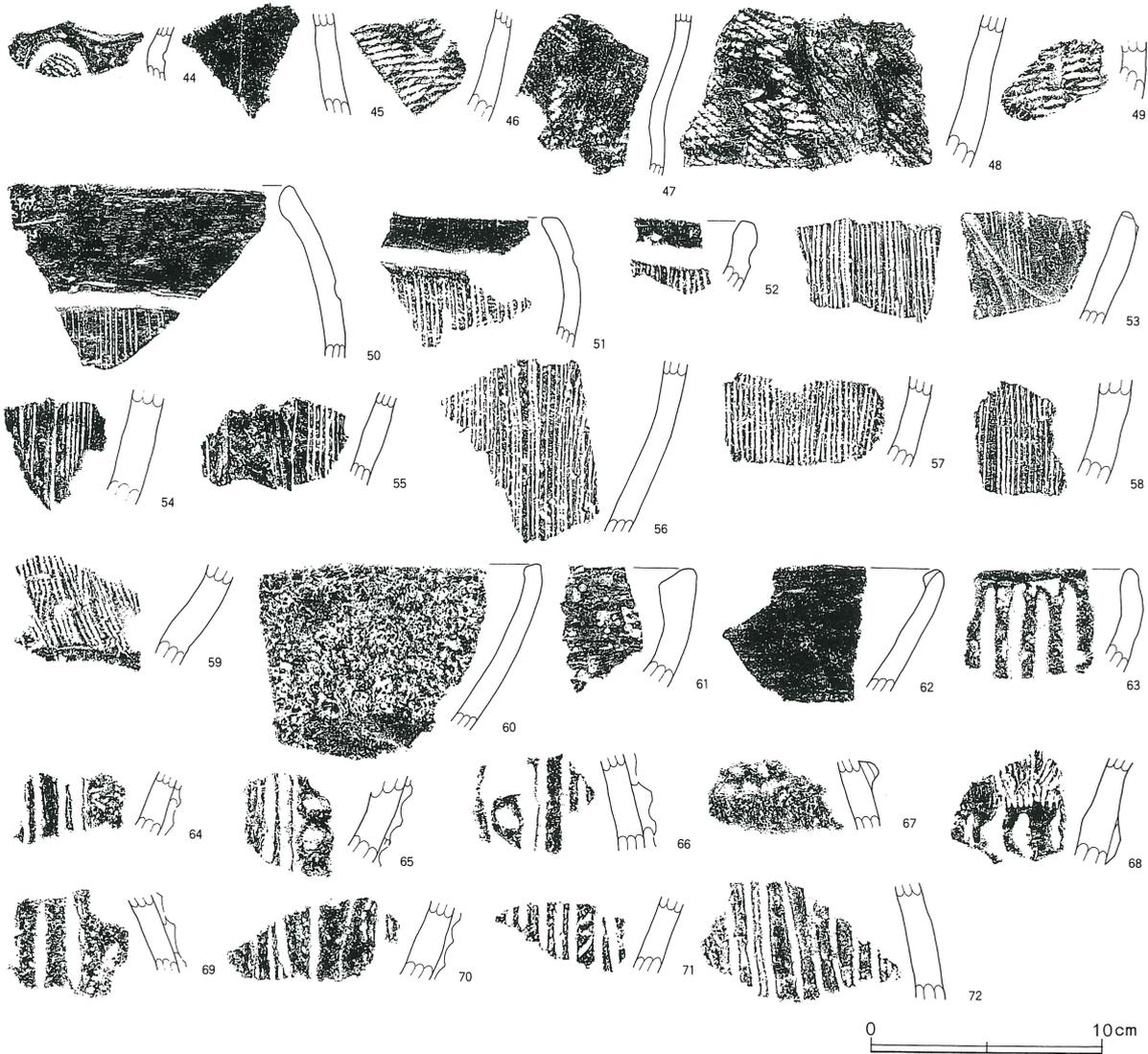
第14図 A区第2号住居跡出土土器(1)



第15图 A区第2号住居迹出土土器(2)



第16図 A区第2号住居跡出土土器(3)



は磨消し懸垂文のみられる胴部である。

44は深鉢胴部中段のくびれ部分で対弧状の磨消し文様がみられる。45は26に似る細手の沈線文が描かれる。

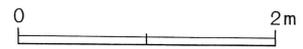
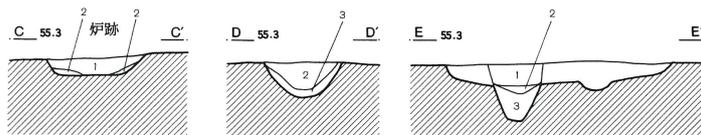
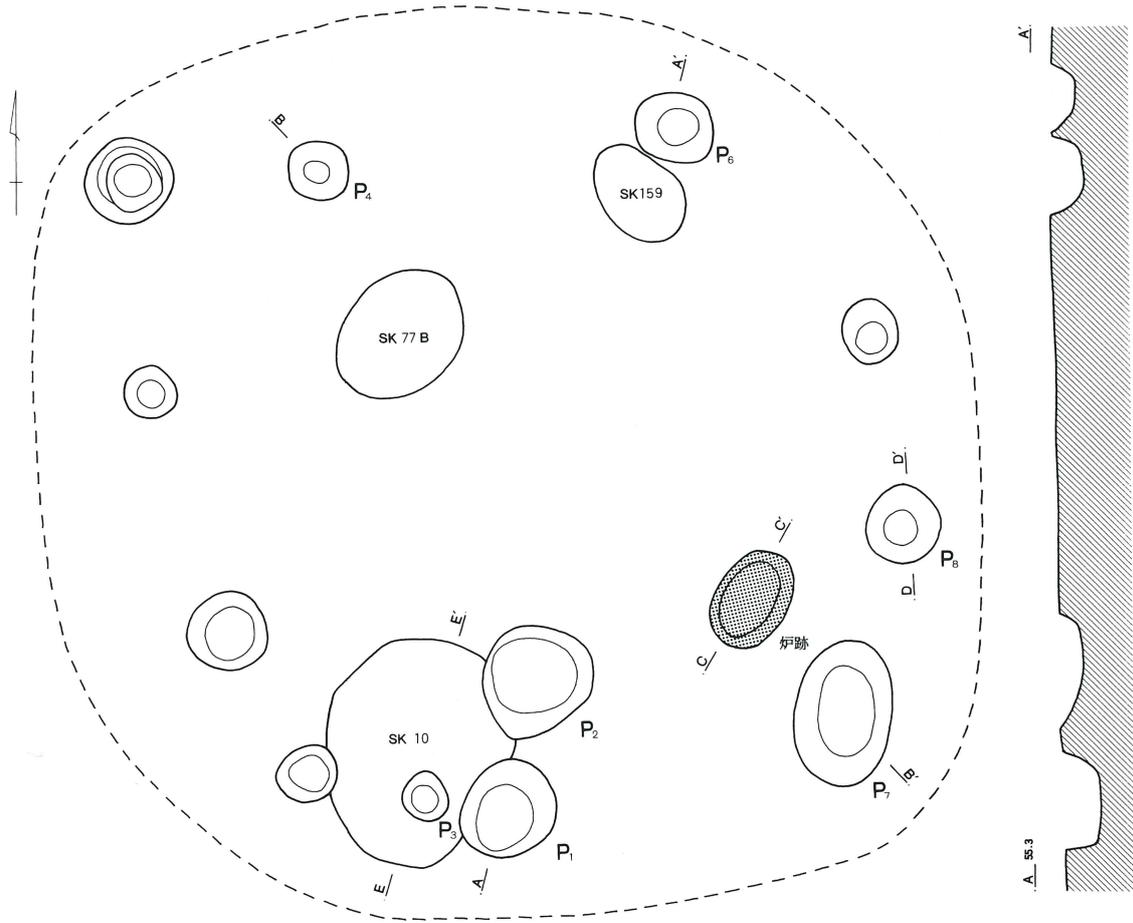
44~49は縄文のみ施文される破片で、いずれも深鉢部である。

50~59は櫛歯状工具による条線のみが施文される。50~52は口縁直下に1条の沈線が巡らされ、それより下に条線が施される。沈線から上は無文化し、入念な研磨が施される。50・51は浅鉢、52は深鉢であると思われる。53は深鉢口縁部で口唇上に篋状工具による刻みが施される。59は底部付近の破片であり、横方向の削りがみられる。

60~62は無文の口縁部である。直線的に開きつつ軽微に内湾するもので、外面には横位の研磨が施され、61・62は内面に断面三角形の貼り付けを巡らせる。曾利系の小形深鉢の口縁であろう。

63以下は曾利系の隆帯文土器である紡錘形の胴部に、内湾する比較的貧弱な口縁が付される独特の深鉢で、棒状工具ないし指頭による刺突や刻みを伴う隆帯によって器面を縦横に分割する。栃木県下など北関東を中心に分布するタイプである。地文は丸棒状工具による集合沈線が主であるが、67・68では櫛歯状工具による条線が用いられる。

第17図 A区第3号住居跡

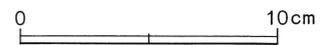
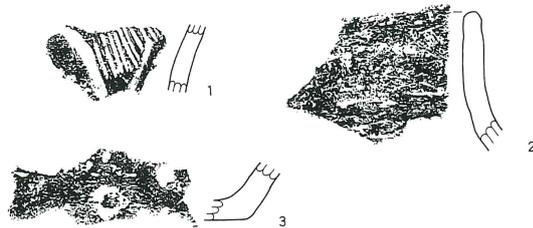


A区SJ3

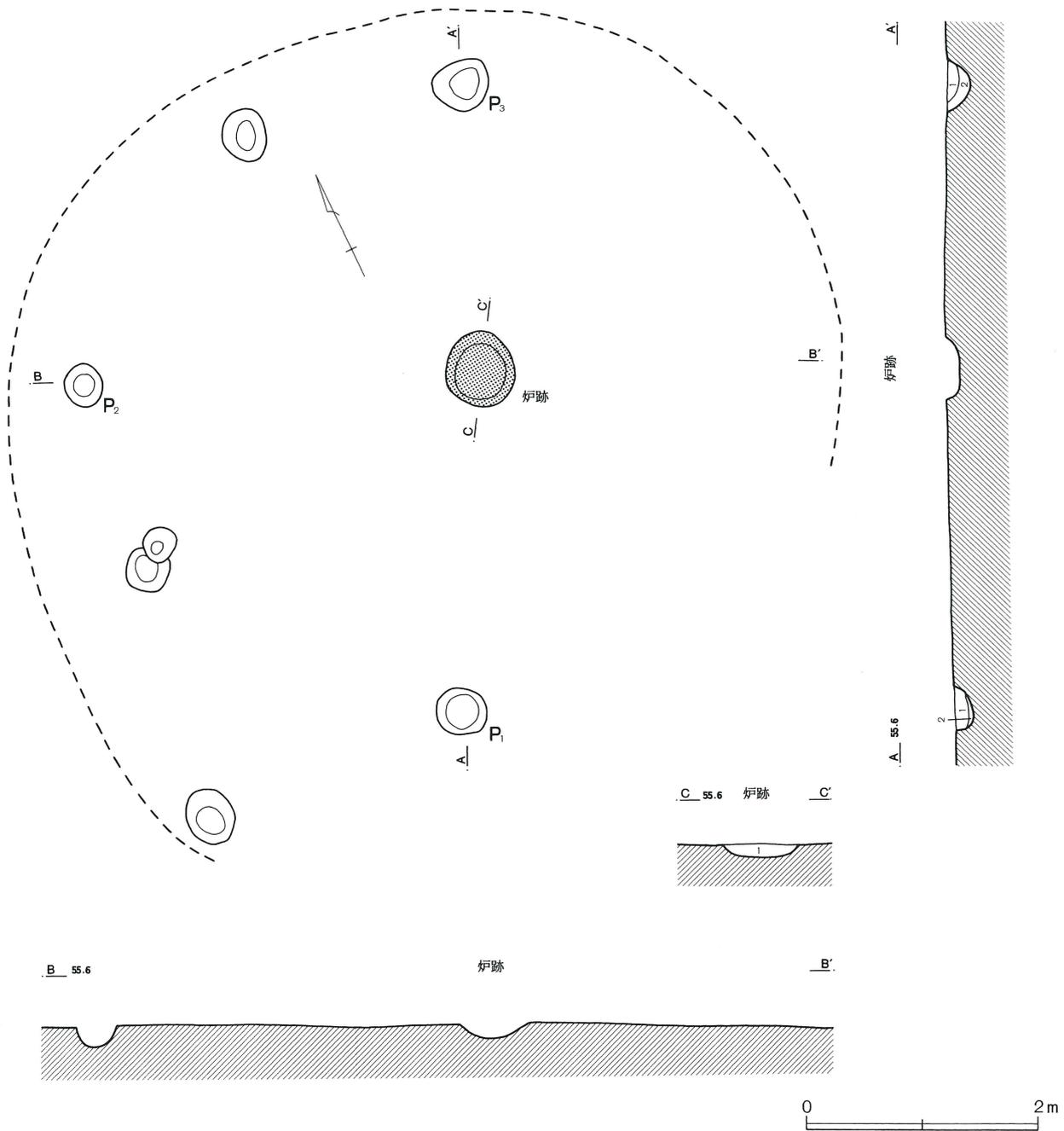
- 1 黒褐色土 : ローム粒子少量含む 粘性弱、締まり強
- 2 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む 粘性やや強、締まり強
- 3 暗黄褐色土 : くすんだローム質土 締まりやや強、粘性強

A区SJ3炉跡

- 1 暗赤褐色土 : 焼土粒子やや多く、炭化物少量含む 粘性やや強、締まり強
- 2 暗褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子少量含む 粘性やや強、締まり強



第18図 A区第4号住居跡



A区S J 4

- 1 褐色土 : ロームブロック、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり欠く
- 2 暗黄褐色土: ロームブロック多く含む、焼土粒子・炭化物微量含む 締まり欠く

A区S J 4 炉跡

- 1 淡赤黄褐色 : 焼土粒子やや多く含む、少量の炭化物含む 粘性欠く

A区第3号住居跡（第17図）

I-10区に所在する。炉跡を中心に大小のピットのみが径約7mにわたって散在する。壁溝・埋甕などは一切検出できなかった。このため、本住居跡の規模・形態・主軸方向などは一切不明である。柱穴とみられるピットは13本が検出されたが、P-3を除けば大半が30cm未満の浅いものであり、また全てが本住居跡に伴うものであるかは不明である。

炉跡はピット群の内部北東寄りで検出された。長楕円形の地床炉で、長径85cm、短径50cm、深さ13cmを測る。炉床面における焼土の存在はさほど顕著ではない。

出土土器（第17図）

炉の周辺を中心に少量の遺物が得られた。いずれも縄文時代中期後葉から末葉の土器の小破片である。1は磨消し連弧文の施文される深鉢胴部と考えられる。地文は櫛歯状工具による条線である。2は両耳壺の口縁で、ほぼ垂直に立ち上がり、口端軽微に内屈する。3は無文の底部で、全面に縦位の磨きが観察される。

A区第4号住居跡（第18図）

H-9・I-9区にわたって所在する。炉跡を中心に大小のピットのみが長径8m・短径7mにわたって散在する。壁溝・埋甕などは一切検出できなかった。このため、本住居跡の規模・形態・主軸方向などは一切不明である。

ピットは7本が検出されたが、いずれも深さ20cm前後の浅いものである。また、全てが本住居跡に伴うものであるかは不明である。

炉跡はピット群のほぼ中央で検出された。不整形の地床炉で、直径約60cm、深さ12cmを測る。

本住居跡に伴う遺物は発見されていない。

A区第5号住居跡（第19図～第21図）

H-8区に所在する。南西壁の一部を第7号住居跡に切られ、さらにこの部分から床面中央部付近にかけての部分を広く第16号土壇に切られる。長径4.7m、短径4.2mの楕円形を呈するやや小型の住居跡で、主軸はほぼ真北を指す。壁高は最も残りの良い部分でも5cm程度である。床面は若干の起伏を帯びるがほぼ平

坦である。

後段で述べるように本住居跡は2基の炉跡を検出している。このため、本来2軒の住居跡の切り合いである可能性が高いが、調査の段階では明らかにし得なかった。

床面および切り合い関係にある第16号土壇底面から10本のピットが検出された。これらのうちP-1～7は支柱穴であると考えられるが、床面中央部に不規則に密集する傾向にあり、支柱配置は不明である。ただし、P-4・5・6は炉跡1に対応する入り口ピットである可能性がある。この場合主軸方向N-34°-E、炉跡1を中心にほぼ等間隔で壁柱穴を巡らせる径4～4.5mの円形の住居跡プランを想定しうる。

炉跡1は住居跡主軸線上やや北寄りに位置する。キャリパー類の大型深鉢を正位に埋設する埋甕炉である。掘り方部分は長径約90cmの不整形で、深さ20cmを測る。

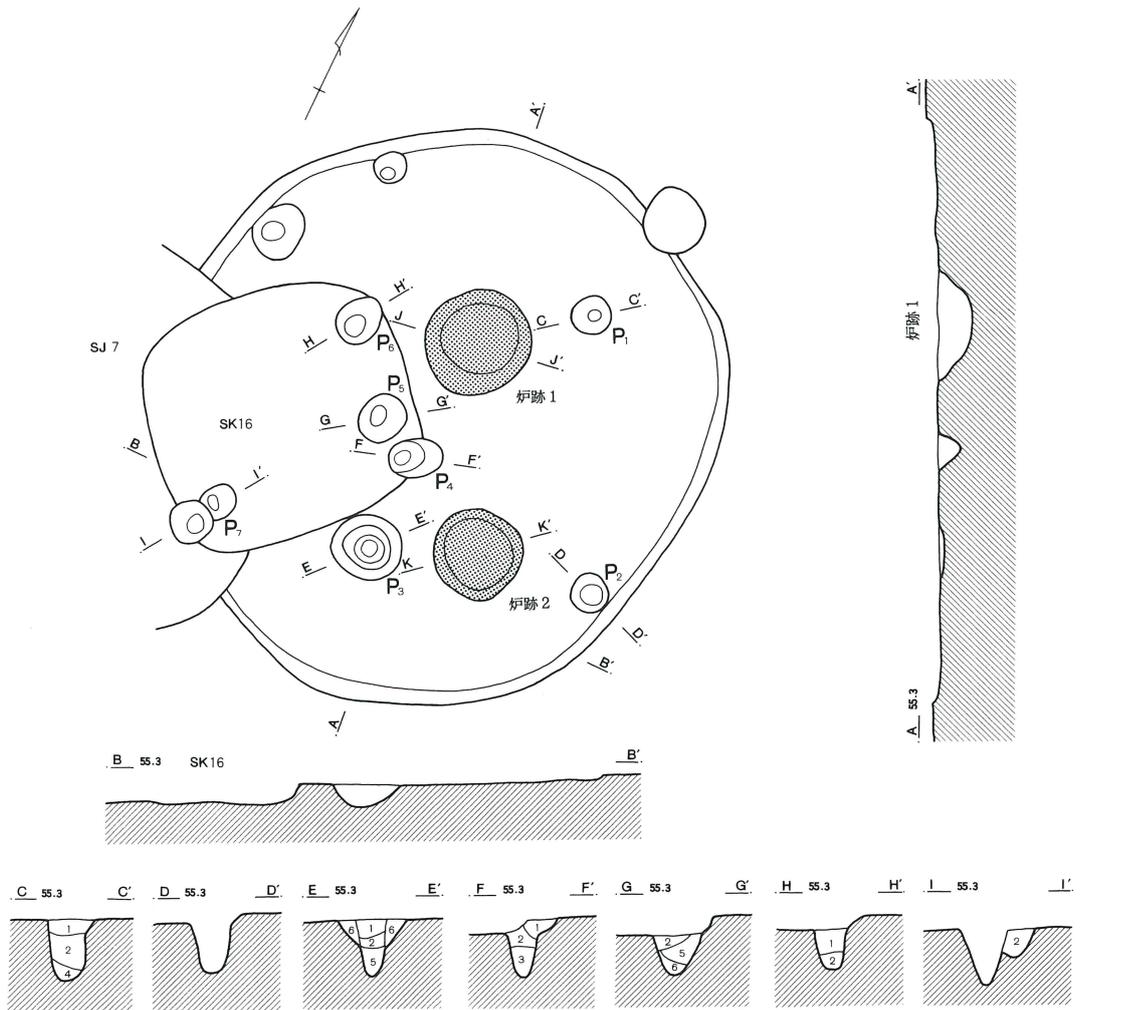
炉跡2は床面南東壁近くに位置する。キャリパー類の大型深鉢の胴部中段のみを正位に埋設する埋甕炉である。掘り方部分は長径70cmの不整形で、深さ16cmを測る。炉体土器は炉跡1のものに比べ残存状態が悪く、特に北西部分では小破片が不規則に散布する状態である。このため、本炉跡は炉跡1を伴う住居跡の構築段階で削平され、破壊されたものと考えられる。胴部中段のみを検出した炉体土器も、本来口縁までを埋設していたものがこの時点で破壊されたのではあるまいか。

出土土器（第20図・第21図）

1は炉跡1の炉体土器である。キャリパー類の大型深鉢である。

口縁部文様は扁平な隆沈線によって描かれる。本来の渦巻+楕円形の区画文という構成はすでに失われ、一筆書き風の入り組み文となっている。頸部は無文地に横長の楕円文が連続し、胴部には唐草文の系譜を引く渦巻モチーフが展開するものと思われる。なお、本個体における文様の割り付けは口縁部の入り組み文が5単位、胴部渦巻文が4単位で構成されており、両者

第19図 A区第5号住居跡

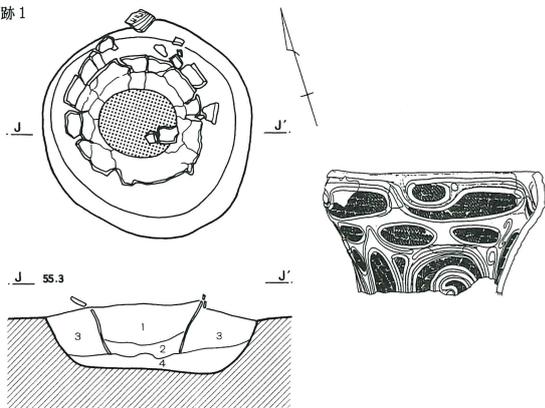


A区S J 5

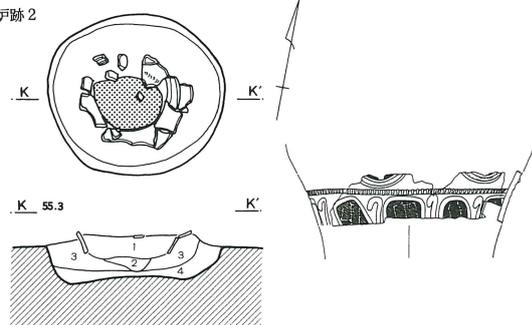
- 1 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
- 2 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む
- 3 暗褐色土 : ロームブロック多量に含む
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック多量に含む
- 5 黒色土 : ロームブロック少量含む
- 6 暗黄褐色土 : ローム粒子多量に含む



炉跡1



炉跡2

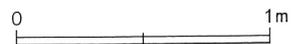


A区S J 5 1号炉跡

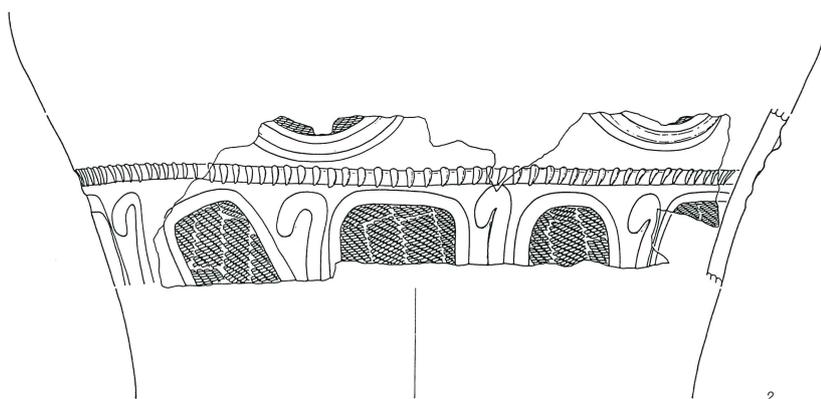
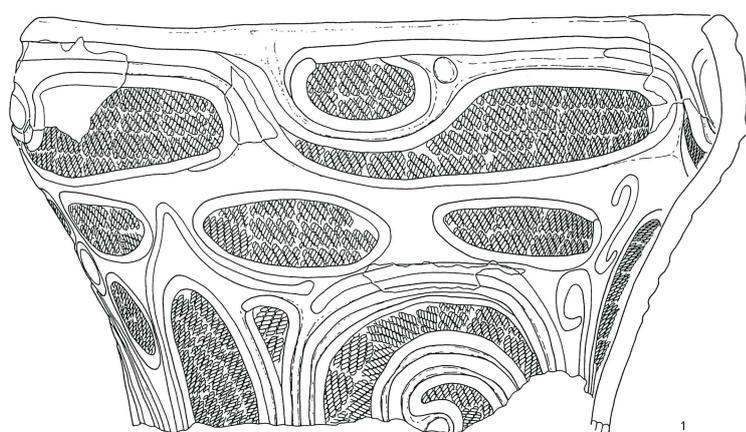
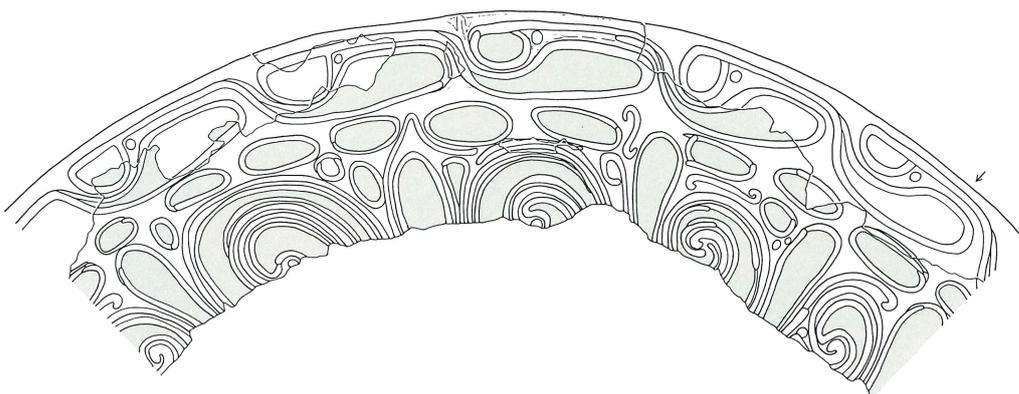
- 1 暗褐色土 : 焼土粒子やや多く含む、少量の炭化物を含む
- 2 暗褐色土 : 多量の焼土を含む
- 3 暗褐色土 : 微量の焼土・炭化物含む
- 4 淡赤黄褐色土 : 被熱した再堆積ローム

A区S J 5 2号炉跡

- 1 暗褐色土 : 少量の焼土粒子、微量の炭化物含む
- 2 暗褐色土 : 多量の焼土粒子、少量の焼土ブロックを含む
- 3 暗褐色土 : 微量の焼土粒子・炭化物含む
- 4 暗黄褐色土 : 再堆積ローム微量の炭化物を含む

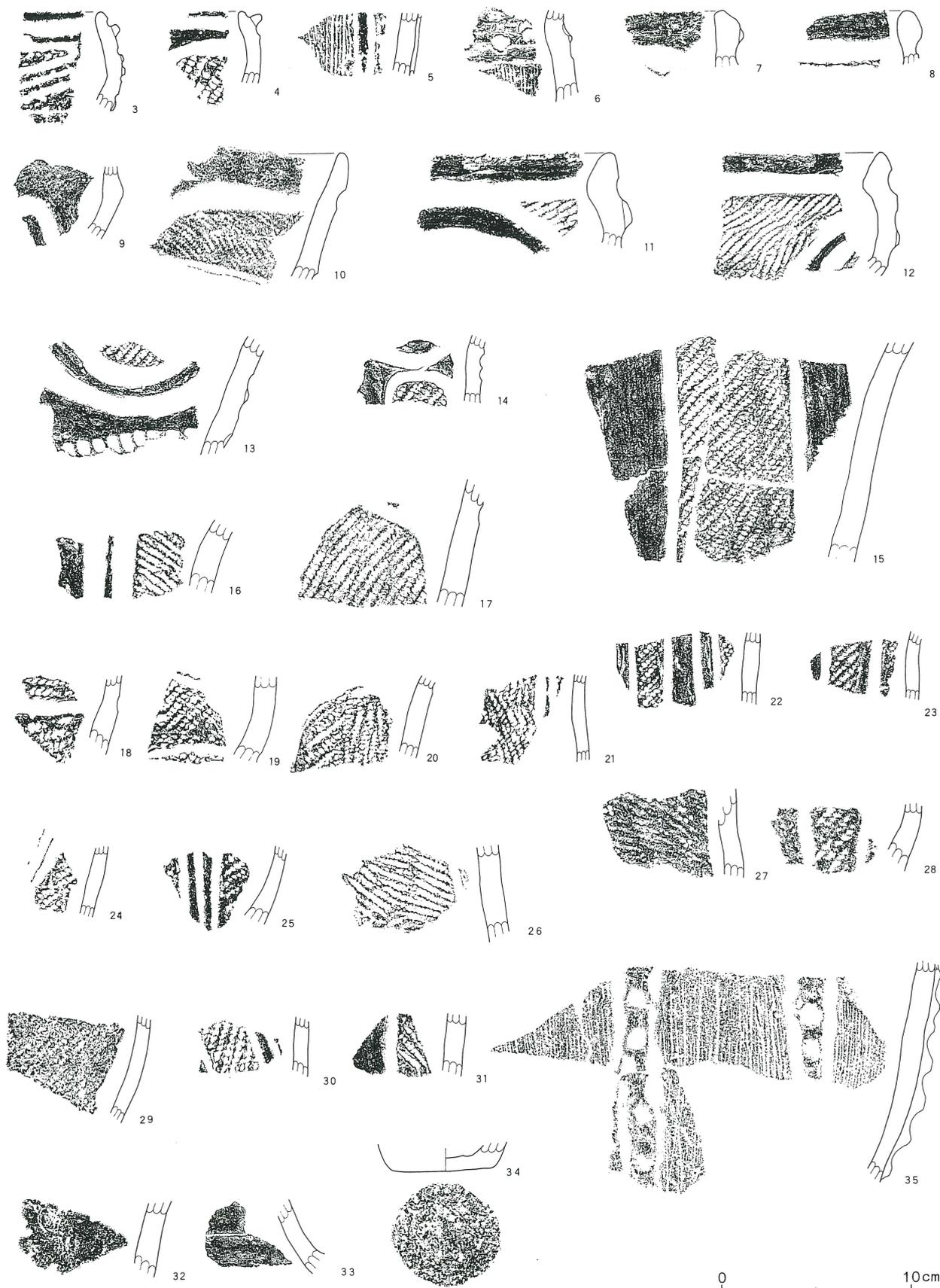


第20图 A区第5号住居跡出土土器(1)



0 10cm

第21图 A区第5号住居迹出土土器(2)



の間にずれが生じている。地文はRL単節の縄文で、頸部以上ではほぼ横位回転、胴部では充填縄文の手法が採られている。現存高28.0cm、最大径48.7cm、口径45.0cmを測る。

2は炉跡2の炉体土器で、胴部中段のくびれ部分のみが残存する。半裁竹管状工具の背面を用いた押し引き風の刺突列によって器面を上下に分帯する。胴上半部には隆沈文による半円状の区画が描かれ、区画内にはLR単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。胴下半部には逆U字形の沈線区画が描かれ、区画内には縄文が縦位に施文される。区画どうしの間隙にはわらび手状の沈線が垂下する。現存高12.0cm、最大径49.2cmを測る。

3～6は本住居跡より古い時期の破片で、覆土中への混入とみられるものである。7～12はキャリパー類の口縁部である。11・12は吉井城山類の口縁で、同一個体の可能性がある。隆沈文による逆U字モチーフがみられる。13は半裁竹管状工具による刺突列が巡る頸部で、2の同一個体である可能性もある。隆沈線による半円形の区画がみられ、区画内に縄文が施文される。14～25・30・31は磨消し縄文のみられる胴部である。大半は磨消し懸垂文で、地文は縦位回転の単節縄文である。14は胴部中段のくびれ部分で、対弧状の区画がみられる。19は磨消し連弧文の一部であろう。26～28は単沈線による磨消しを伴わない懸垂文である。29は縄文のみ施文される。32・33は無文の破片で、33は両耳壺の頸部であろう。34は無文の底部である。35は曾利系の隆帯文土器の胴下半部である。地文は櫛歯状工具による条線である。

A区第6号住居跡（第22図～第23図）

H-8区に所在する。今回の発掘調査で唯一発見された古代の住居跡である。東壁と北壁の大半、南壁の一部が調査区域から外れているが、柱穴の位置などから平面形は南北に長い長方形であると考えられる。主軸方向はN-7°-Eを指すものと思われる。長径4.75m、短径は不明である。壁は北壁ではほぼ垂直に、南・西壁では若干の傾斜を持って立ち上がる。壁高は

残りの良い部分で30cmを測る。

床面は部分的に若干の起伏を帯びつつもほぼ平坦である。壁溝は深さ7～14cmで、調査した範囲では全周する。カマドおよび貯蔵穴は検出できなかった。これらは調査区域外に位置するものと思われる。

ピットは3本検出された。規模はいずれも貧弱で、最も深いP1が27cm、最も浅いP2では10cmに満たない。しかし、床面上における位置関係などからもこれらを本住居跡に付属する柱穴と考えるのが自然であり、今回検出された3本に恐らくは床面北東コーナーに位置するであろう1本を加えて、4本柱を構成するものと考えられる。掘り方は床面中央部から北寄りの部分を台状に掘り残し、周囲を掘りくぼめるものである。

遺物は大半が縄文土器片であり、覆土中への混入である。本住居跡に確実に伴う遺物は、P2の東、床面直上で出土した坏が1点のみであった。

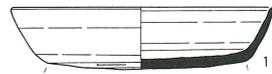
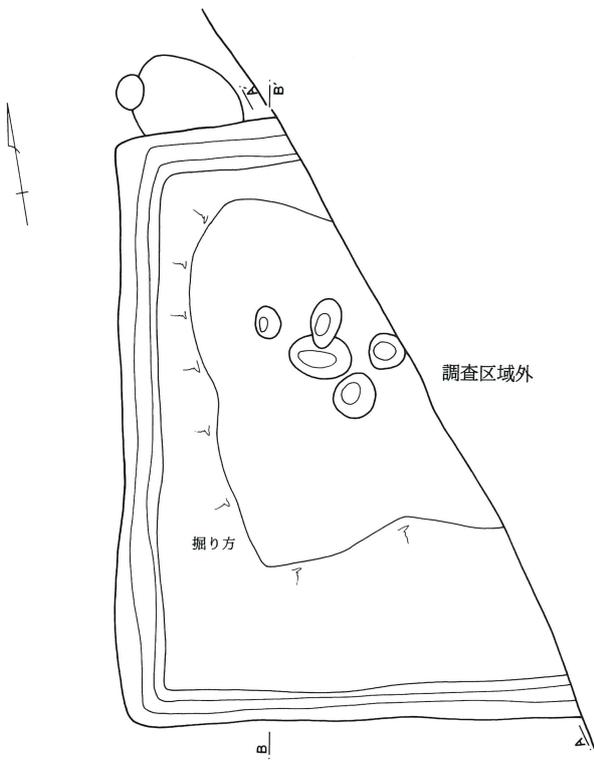
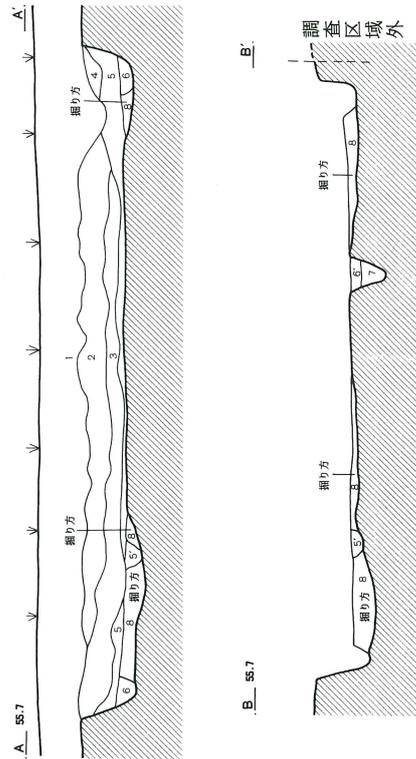
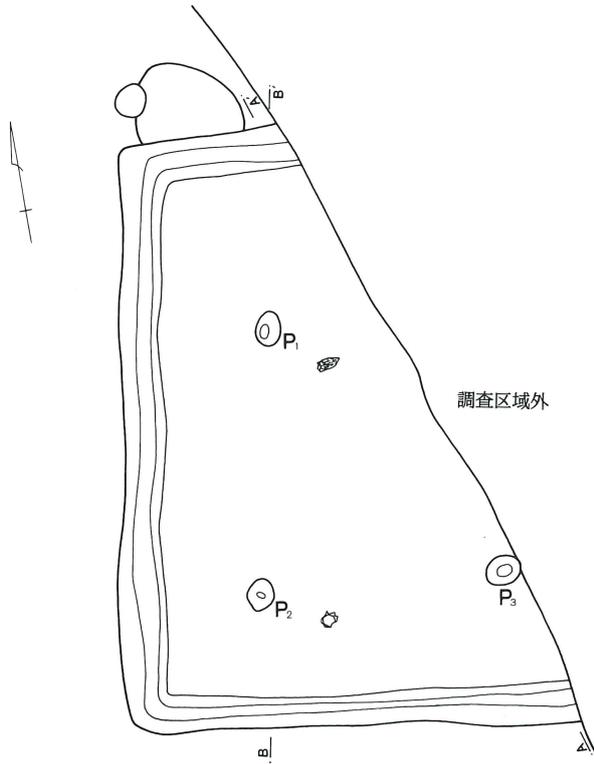
出土土器（第23図）

1は床面出土の須恵器坏である。底部は完存し、口縁は5%程度が残存する。口径13.8cm、器高3.3cm、底径10.6cmを測る。器形は体部に腰を作らず丸味をもっており、底部は全面へら削り調整が施される。内面底部には研磨の跡がみられ、光沢が顕著である。墨痕がみられないが、転用硯として使用された可能性がある。器壁灰色で胎土中に石英と白色針状物質が混入されており、南比企産と考えられる。

2以下は覆土中に混入した縄文土器である。2・3はキャリパー類の口縁部文様帯で、撚糸文を地文に持つ。4・5は連弧文系で、4は口縁、5は胴部中段を横走する沈線区画である。6は櫛歯状工具による縦位の条線がみられる。7～9はキャリパー類の口縁部で、隆沈線による横位の区画文を構成するものと思われる。10は磨消し懸垂文と沈線による蛇行懸垂文が交互に施文される胴下半部である。地文は櫛歯状工具による条線であるが、横方向の施文が特徴的である。

11は波状口縁の波頂部である。全体に扁平で、内面稜をなして外反する。12はいわゆる梶山類の隆帯渦巻

第22図 A区第6号住居跡



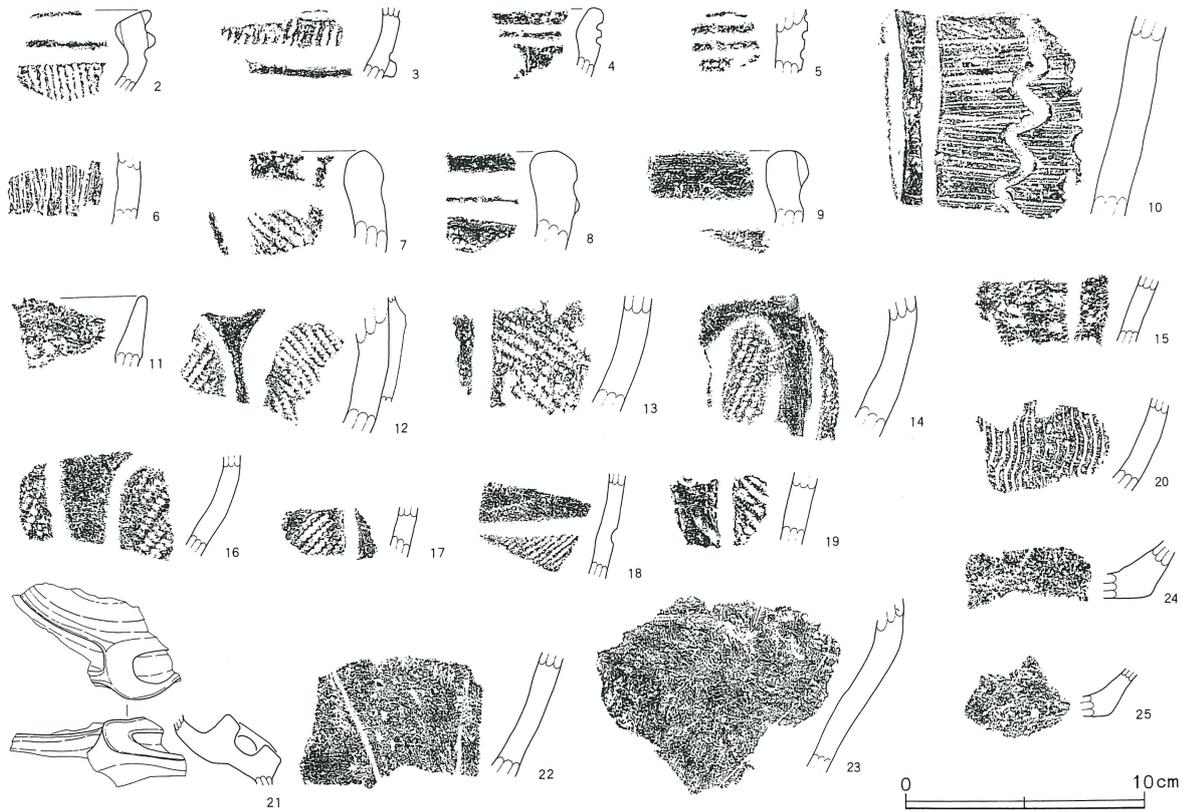
0 5cm

A区S J 6

- 1 褐色土 : 表土・耕作土 粘性欠き、締まりなし
- 2 黒色土 : 炭化物・焼土多量に含む 締まり・粘性弱
- 3 黒褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子やや多く含む 締まりやや強、粘性弱
- 4 暗褐色土 : ローム粒子多量、焼土ブロック少量含む 締まり強、粘性弱
- 5 暗褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロック少量含む 締まり強、粘性弱
- 5' 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子微量含む 締まりよし、粘性やや有り
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量に含む 締まり強、粘性やや強
- 6' 暗黄褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子多量に含む 締まりやや欠き、粘性有り
- 7 黄褐色土 : ロームブロック多く含む 締まりよし、粘性やや有り
- 8 暗黄褐色 : 黒色土斑状に含む 強く締まっている 掘り方埋土

0 2m

第23図 A区第6号住居跡出土土器



文である。13～19は磨消し縄文のみられる胴部破片である。

20は櫛歯状工具による波状の条線が縦位に施文される。21は壺形土器の肩部である。22は鋸歯状の沈線がみられ、縄文は施文されない。23は無文の胴下半部である。24・25は無文の底部である。

A区第7号住居跡（第24図～第25図）

H-8区に所在する。北西壁で第5号住居跡を切り、さらに第16号土壇に切られる。また、西壁の一部を第18号土壇に切られる。炉跡と埋甕を結ぶ線を軸に据えた場合、N-104°-Eを指す。長径3m、短径3.3mの楕円形を呈する非常に小型の住居跡である。壁高は20cm前後であり、立ち上がりは比較的緩やかである。壁溝は東壁と西壁の一部で切れるが、ほぼ全周している。床面は炉周辺で高く、逆に埋甕付近では若干の窪みを生じる。

炉跡は床面ほぼ中央に位置する。10個あまりの石材から構成される円形の石囲炉で、石囲部分の径は52cm、

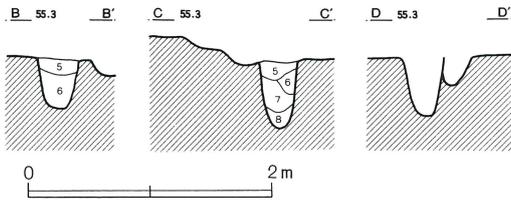
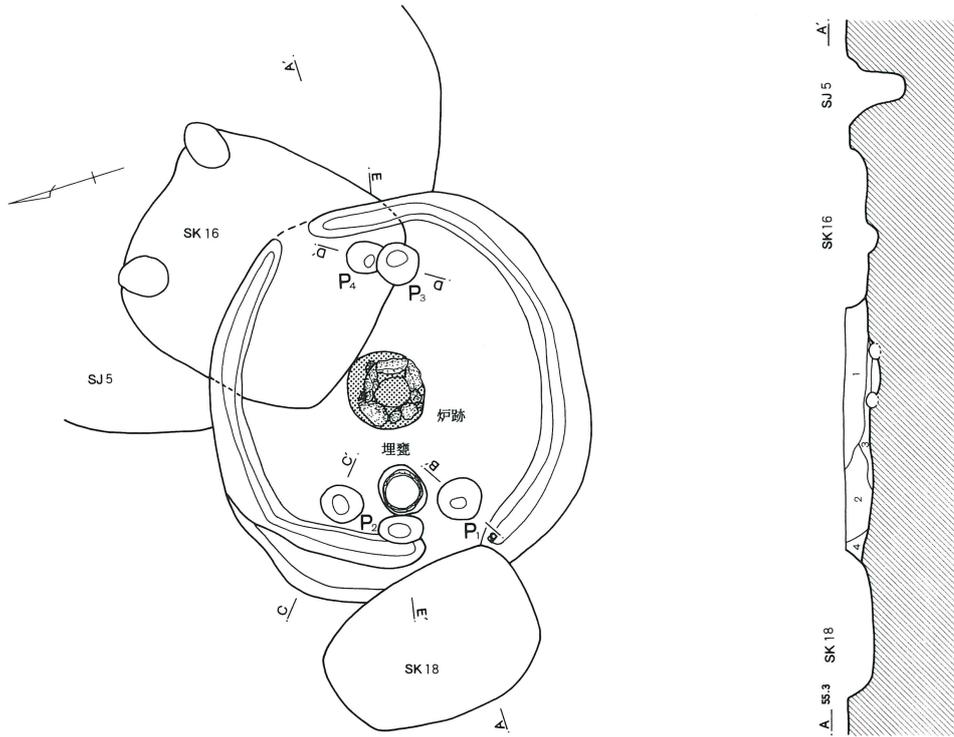
掘り方部分は不整楕円形で長径60cm、短径52cm、全体の深さは約21cmを測る。

炉跡から主軸線上西寄りに埋甕を検出した。ほぼ完形の深鉢を正位に埋設したものである。深鉢口縁は床面上に2cm程度露出し、一方で底部はピット底面から若干浮いている。埋甕埋設のためのピットは口径・深さとも40cmである。

本住居跡に伴うピットは5本検出されている。うち1基は埋甕と壁溝の間に検出されたもので、これについては柱穴というよりは出入り口部に伴う何らかの施設に属するものと考えられる。残る4本のうちP-1・2・3は支柱穴と考えられる。深さはいずれも40～50cmを測り、P1・P2は埋甕をはさんで左右対象に位置し、残るP3が主軸線上奥壁寄りに位置しており、典型的な3本支柱を構成している。P3と重複して検出されたP4は建て替えによる重複か、あるいはP3の補強の意味を持つものであるかもしれない。

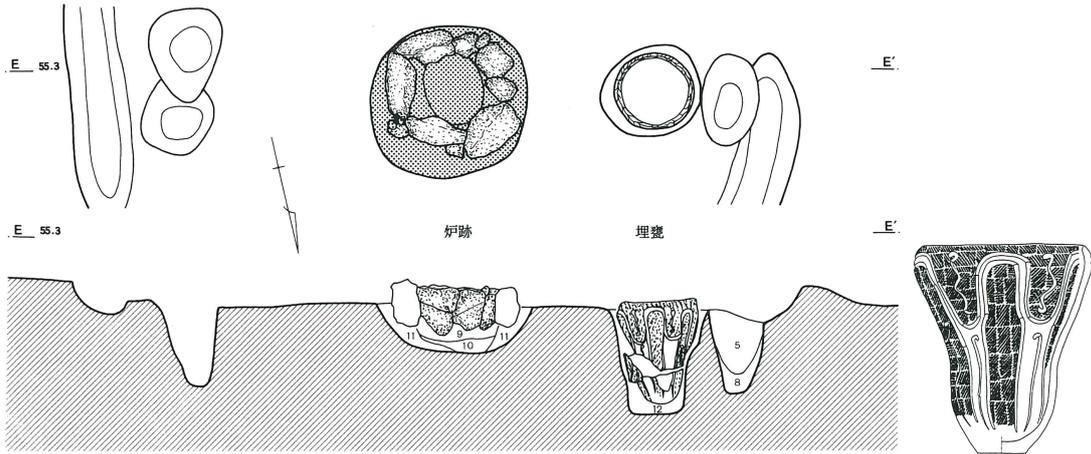
先に述べたとおり、本住居跡は長径にして3mそこ

第24図 A区第7号住居跡



A区SJ 7

- 1 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物・焼土粒子多量に含む 締まり強、粘性弱
- 2 黒褐色土 : 1層に似て、炭化物多量に含む 締まり強、粘性弱
- 3 暗黄褐色土 : ローム主体に、少量の炭化物含む 締まり強、粘性やや強
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック含む 締まり強、粘性やや強
- 5 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む
- 6 黒褐色土 : 径の大きなロームブロック・ローム粒子微量含む
- 7 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
- 8 暗黄褐色土 : ロームブロック少量含む

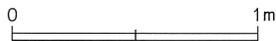


A区SJ 7 炉跡

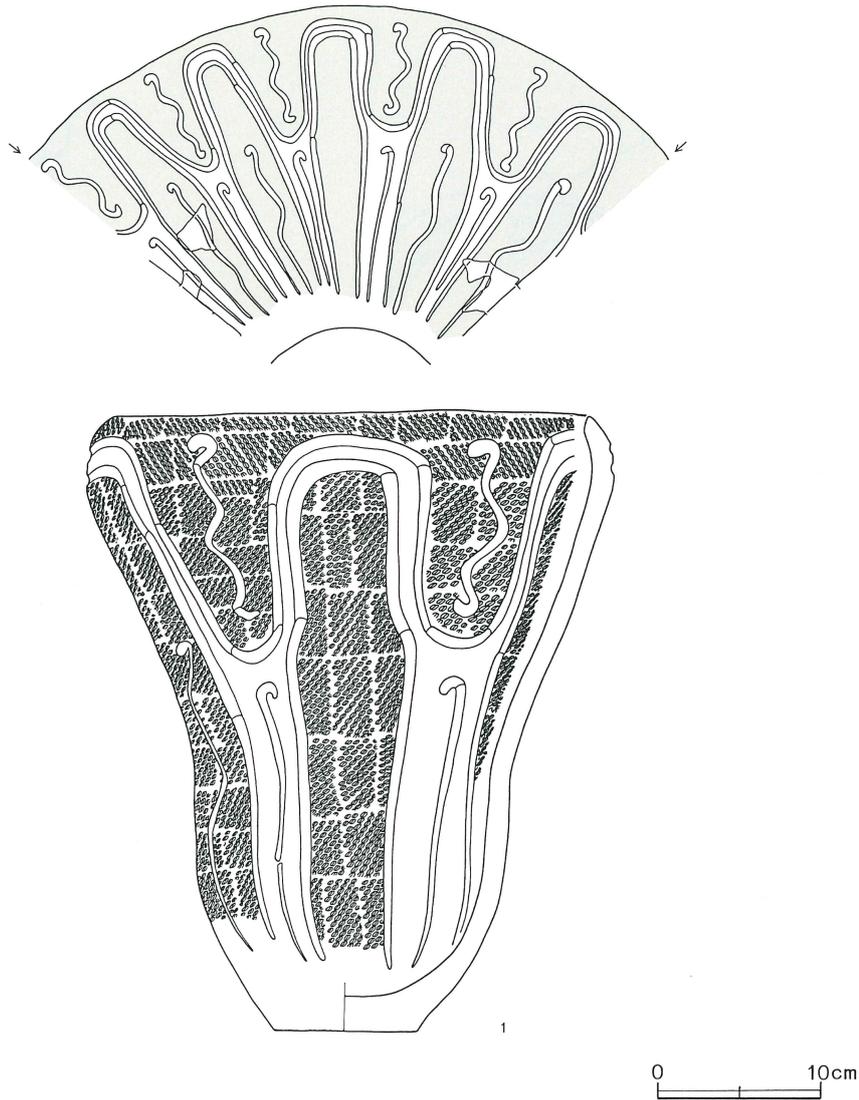
- 9 暗褐色土 : ローム粒子・焼土粒子少量含み、ロームブロック含む 締まり強、粘性弱
- 10 暗褐色土 : 焼土粒子多量に含み、ロームブロックやや多く、炭化物少量含む 締まりやや強、粘性弱
- 11 黒褐色土 : 被熱ロームブロック多量に含む 炉構築土

A区SJ 7 埋壑

- 12 暗褐色土 : ロームブロック少量含む やや締まり欠く 埋壑埋設に伴う埋め戻し



第25図 A区第7号住居跡出土土器（1）



そこの非常に小型の住居跡で、入り口部と想定される西壁側壁溝上場から炉跡までの距離は1.1m、埋甕から炉跡までの距離にいたっては1mに満たない。また、埋甕をはさんで対置される2本の柱穴も、ピットの埋甕側上場どうしの間隔が60cm程度である。柱穴と柱材本体の太さの違いからくる余裕を差し引いても、荷物を持った大人が日常的に出入りするにはあまりに狭い空間であると言わざるを得ない。

本住居跡からは縄文時代中期末葉を中心とした土器・石器が出土している。

出土土器（第25図・第26図）

1は埋甕である。吉井城山類の深鉢で、胴部の一部を除いてほぼ完全な形で出土した。口縁部から同上半

部にかけて大きく蛇行しつつ横走る波状区画線と、その波底部において区画線に連結する懸垂文によって文様が構成されている。区画線によって口縁下に形成されたU字形の空間には上下で閉塞するわらび手状沈線が描き込まれ、また懸垂文部にも下端解放するわらび手沈線が描き込まれる。地文はRL単節の縄文が胴部では縦位、口縁部付近のみ横位に施文される。器高38.0cm、口径29.2cm、底径8.7cmを測る。

2・3は本住居跡より古い時期のもので、混入と考えられる。2は頸部無文帯とその下端を区画する隆帯、3は隆帯懸垂文である。4～7はキャリパー類の口縁部文様帯である。6・7は文様帯下端を区画する隆帯で、胴部との区画は本時期としては比較的明瞭である。

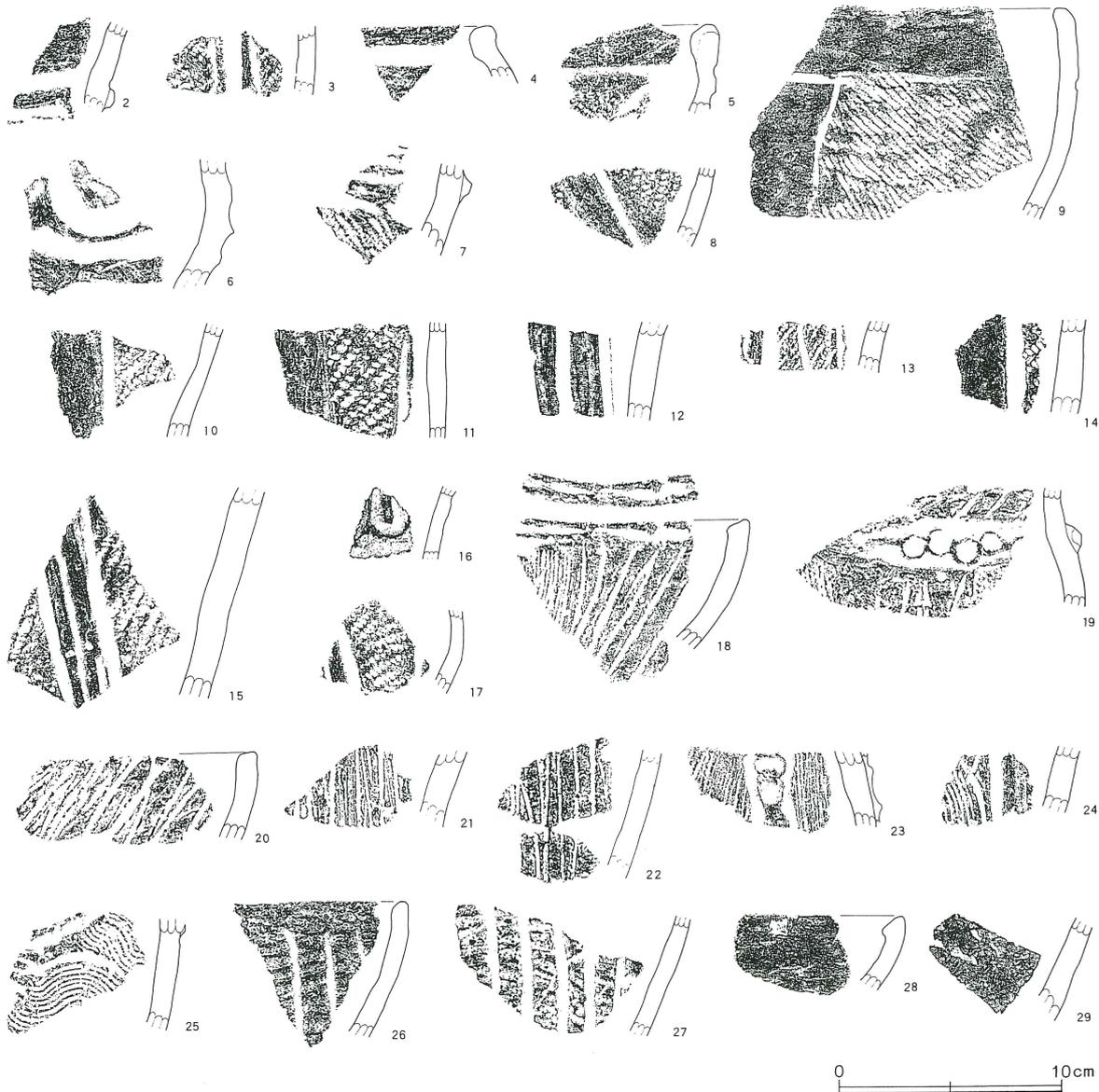
9は一段懸垂文類の口縁である。口縁下を途切れず全周する沈線に、幅広の磨消し懸垂文が接続する。8・10～15は磨消し懸垂文の深鉢胴部である。二本沈線と三本沈線が存在し、13は縄文部に蛇行懸垂文がみられる。16・17は両耳壺の胴部と思われるものである。16は隆帯上にわらび手状沈線が描かれる。17は磨消し懸垂文である。

18～23は曾利系の隆帯文土器である。18は口縁部で、口端は強い横なでが施され、凹線状になっている。19は頸部のくびれ部分である。丸棒状工具による刺突を

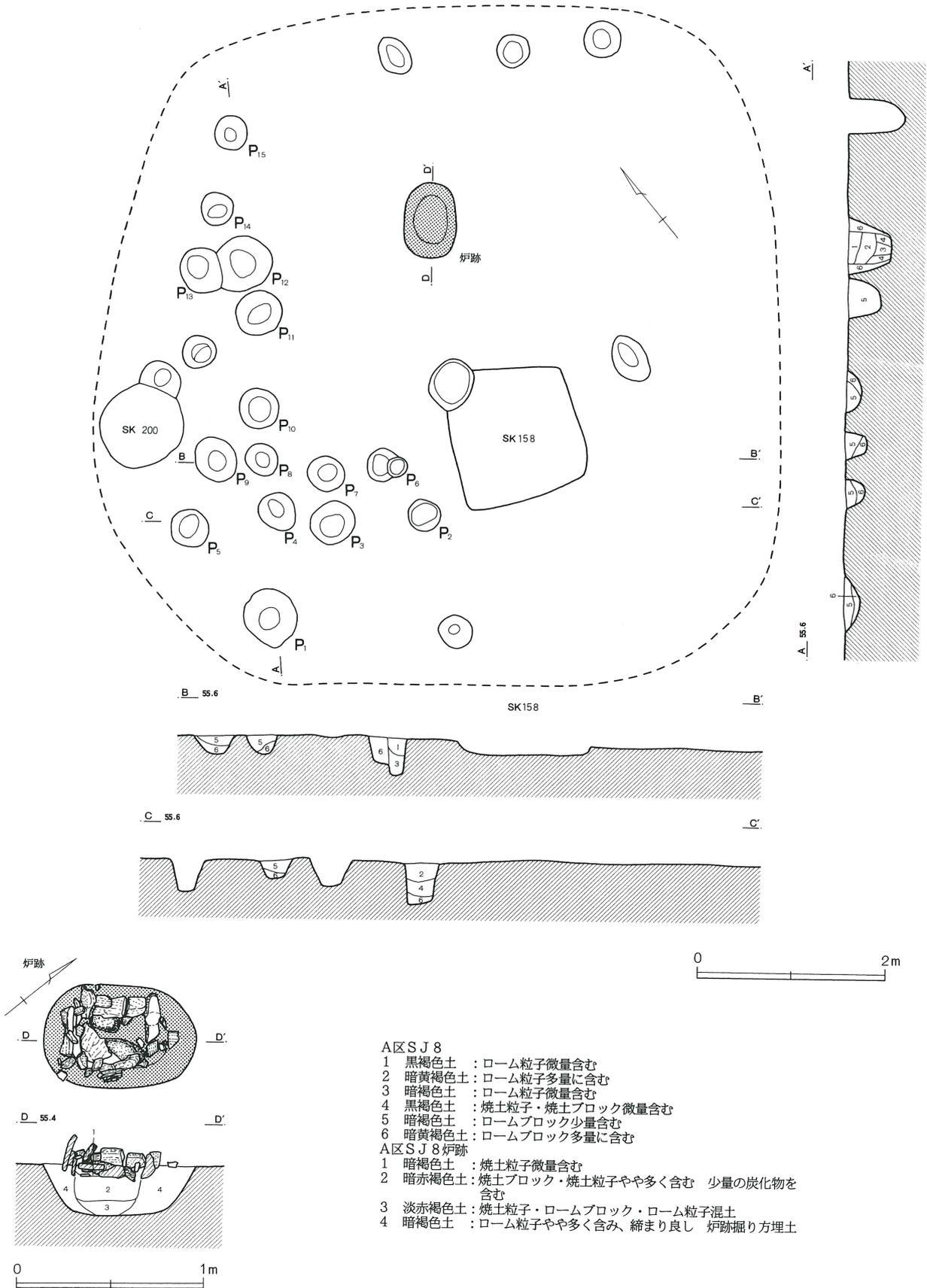
伴う隆帯により胴部と口縁部が区画される。27はこの区画から底部にかけて垂下する隆帯である。なお、26・27も本類に伴うものであるが、地文の沈線が太く、器壁に横位の粗いなで調整が施されるなど独特の雰囲気を持っている。

24・25は櫛歯状工具による波状の条線が施文される。キャリパー類深鉢ないし両耳壺の胴部であろう。28・29は無文の破片で、28は口縁部、29は底部付近の破片である。

第26図 A区第7号住居跡出土土器(2)



第27図 A区第8号住居跡



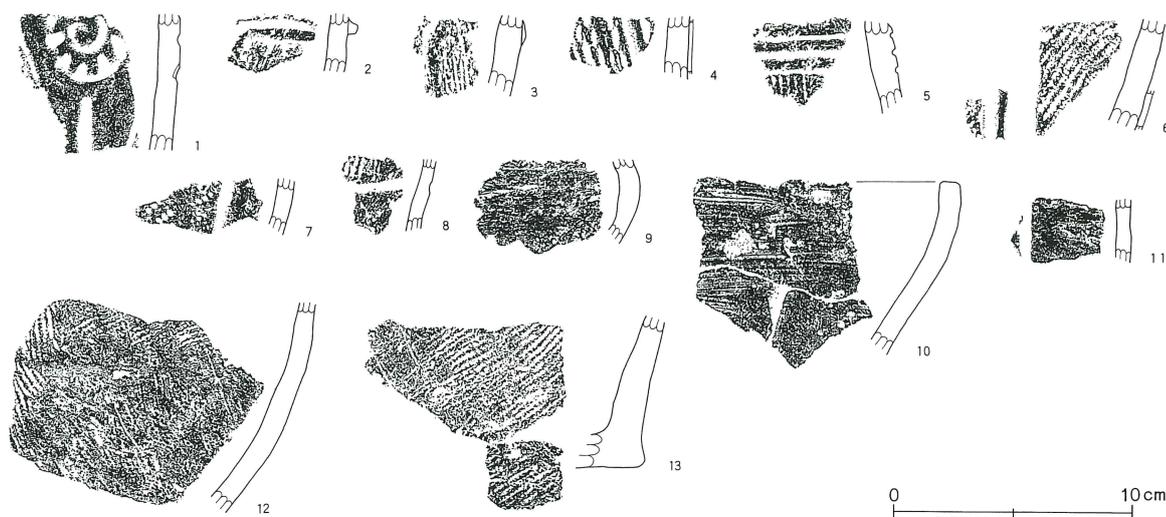
A区S J 8

- 1 黒褐色土 : ローム粒子微量含む
- 2 暗黄褐色土 : ローム粒子多量に含む
- 3 暗褐色土 : ローム粒子微量含む
- 4 黒褐色土 : 焼土粒子・焼土ブロック微量含む
- 5 暗褐色土 : ロームブロック少量含む
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック多量に含む

A区S J 8 炉跡

- 1 暗褐色土 : 焼土粒子微量含む
- 2 暗赤褐色土 : 焼土ブロック・焼土粒子やや多く含む 少量の炭化物を含む
- 3 淡赤褐色土 : 焼土粒子・ロームブロック・ローム粒子混土
- 4 暗褐色土 : ローム粒子やや多く含む、締まりよし 炉跡掘り方埋土

第28図 A区第8号住居跡出土土器



A区第8号住居跡（第27図・第28図）

G-9・H-9区に所在する。炉跡を中心に大小のピットのみが径約6mの範囲に散在する。深さは10cm強のものから45cmを測るものまで様々であるが、全てが炉跡に伴うものであるかは確証がない。壁は全く残存せず、壁溝も検出されなかった。したがって、本住居跡の規模・平面形・主軸方向などは一切不明である。

炉跡はピット群の中央やや北寄りに所在する。方形の石囲炉である。板状節理の石材が多用され、石囲い部分の長径60cm・短径40cm、掘り方部分の長径80cm・短径58cm、全体の深さは30cmである。

出土土器（第28図）

炉跡を中心に少量の土器片が出土している。

1は勝坂系の深鉢胴部である。棒状工具の沈線によって渦巻き状モチーフが描かれ、これに沿って斜位の刺突が施される。渦巻の直下および両側には縦位の沈線が垂下する。2はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。沈線のなぞりを伴う二本隆帯によりクランク状のモチーフが横位に展開する。地文は縦位の撚糸文である。

3～7は同じキャリパー類深鉢の胴部破片である。3・4は隆帯による（蛇行）懸垂文がみられる。地文は縦位の撚糸文である。5は半裁竹管状工具による横

位の区画線で、胴部中段の破片であると思われる。地文は縦位の撚糸文である。6は地文縄文上に隆帯による懸垂文が垂下する。7は幅広の磨消し懸垂文が施文される。

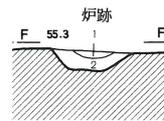
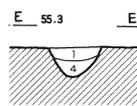
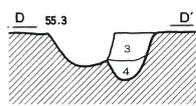
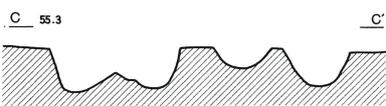
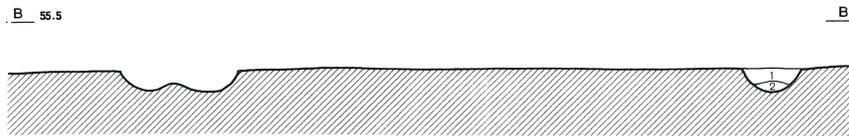
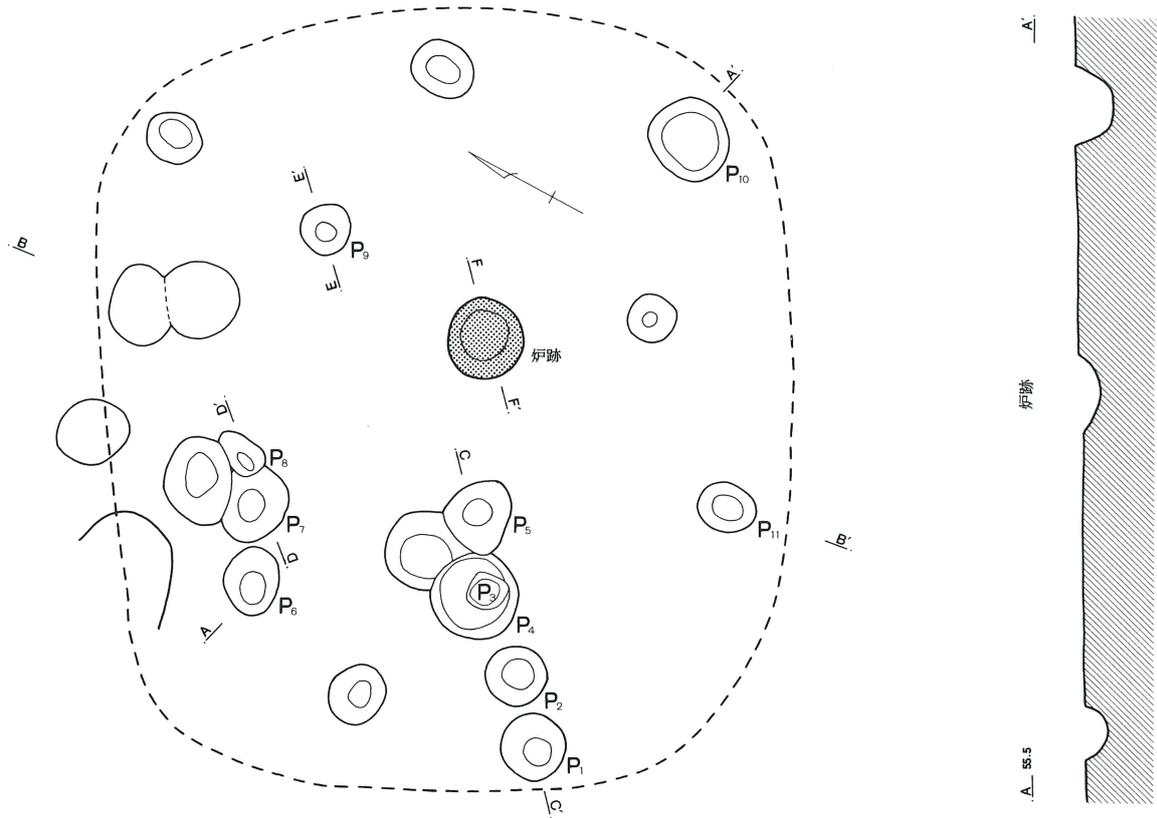
8は磨消し連弧文の一部であると思われる。9は無文胴張りの浅鉢の胴部中段である。10は無文浅鉢の口縁部である。底部から直線的に開いた後、口縁直下で内屈して垂直に立ち上がる。器表面には横方向の擦痕がみられ、口端上はほぼ平坦に整形される。

11は器壁薄手の深鉢胴部で、後期初頭の称名寺式と思われるものである。12・13は同時期の粗製深鉢と思われるものである。12は球胴状に張り出す胴下半部で、LR単節の緻密な縄文が縦横に交錯する。13は底部の破片で、RL単節の縄文が縦位に施文される。特筆すべきは底面にまで縄文が施文されることで、本遺跡出土資料中唯一のケースである。

A区第9号住居跡（第29図・第30図）

H-8区に所在する。炉跡を中心にピット群だけが検出されたものである。ピットは6m×5mの範囲に分布するが、特に西側で密集する傾向にある。深さは最も深いものでも30cmに満たず、また、全てが1軒の住居跡に属するものであるかは確証がない。したがって、本住居跡の正確な規模・平面形・主軸方向等は一切不明である。

第29図 A区第9号住居跡



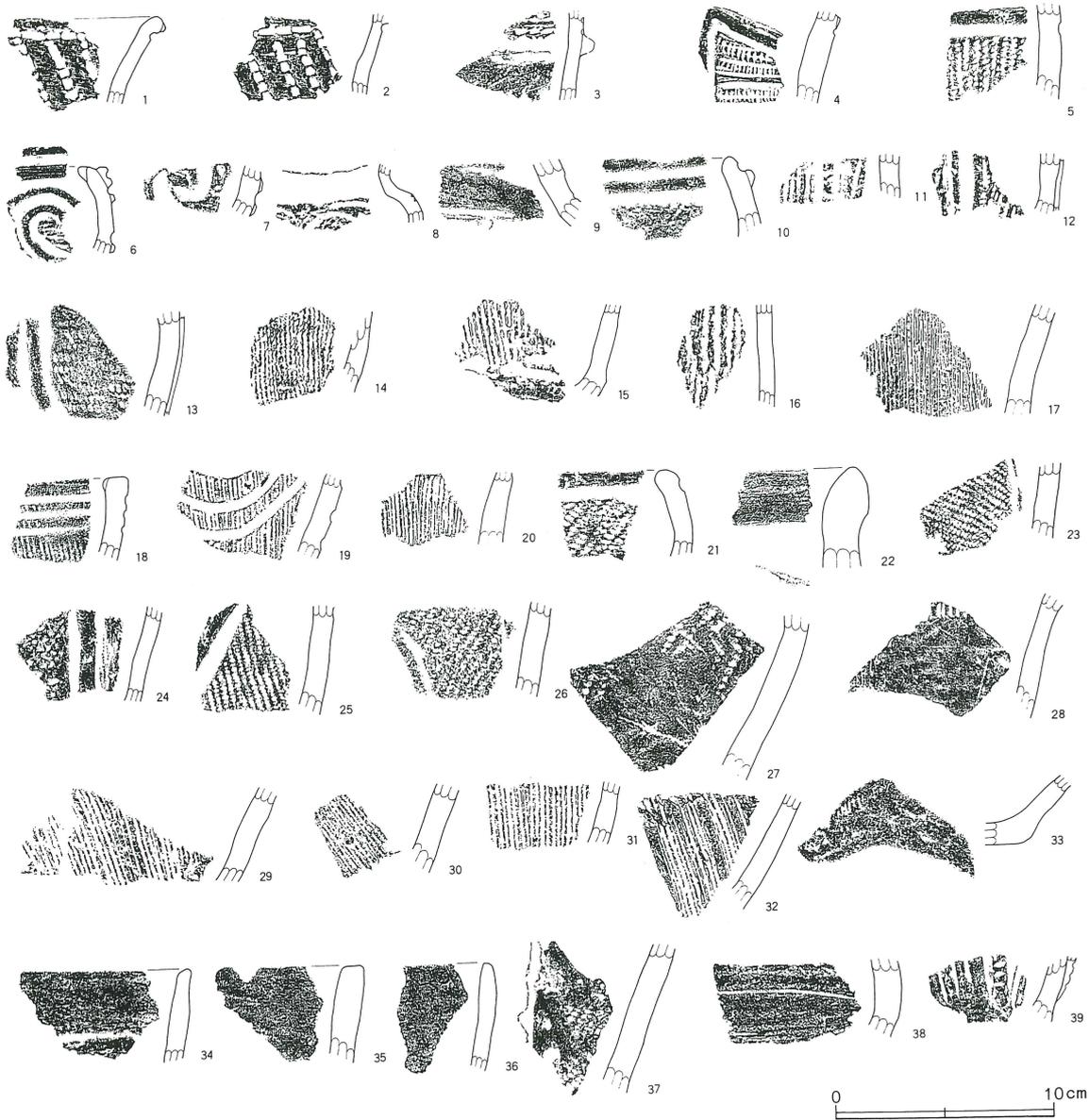
A区S J 9

- 1 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む
- 2 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む
- 3 黒褐色土 : ロームブロック多く含む
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む

A区S J 9 炉跡

- 1 黒褐色土 : 焼土粒子微量含む
- 2 暗黄褐色土 : 焼土粒子・焼土ブロック若干含む

第30図 A区第9号住居跡出土土器



炉跡は円形の地床炉で、ピット群の中央やや東寄りに位置する。直径60cm、深さ15cmを測る。

炉跡周辺およびピット中から少量の遺物が出土した。主体となるのは縄文土器で、いずれも小破片である。

出土土器（第30図）

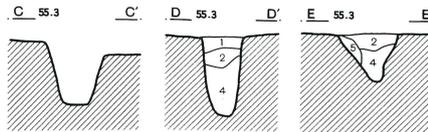
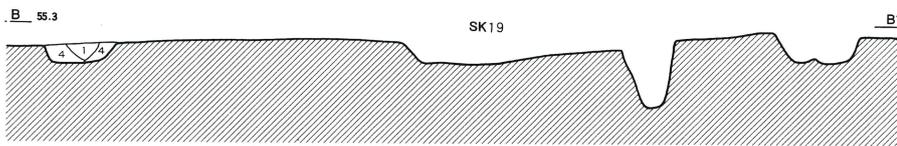
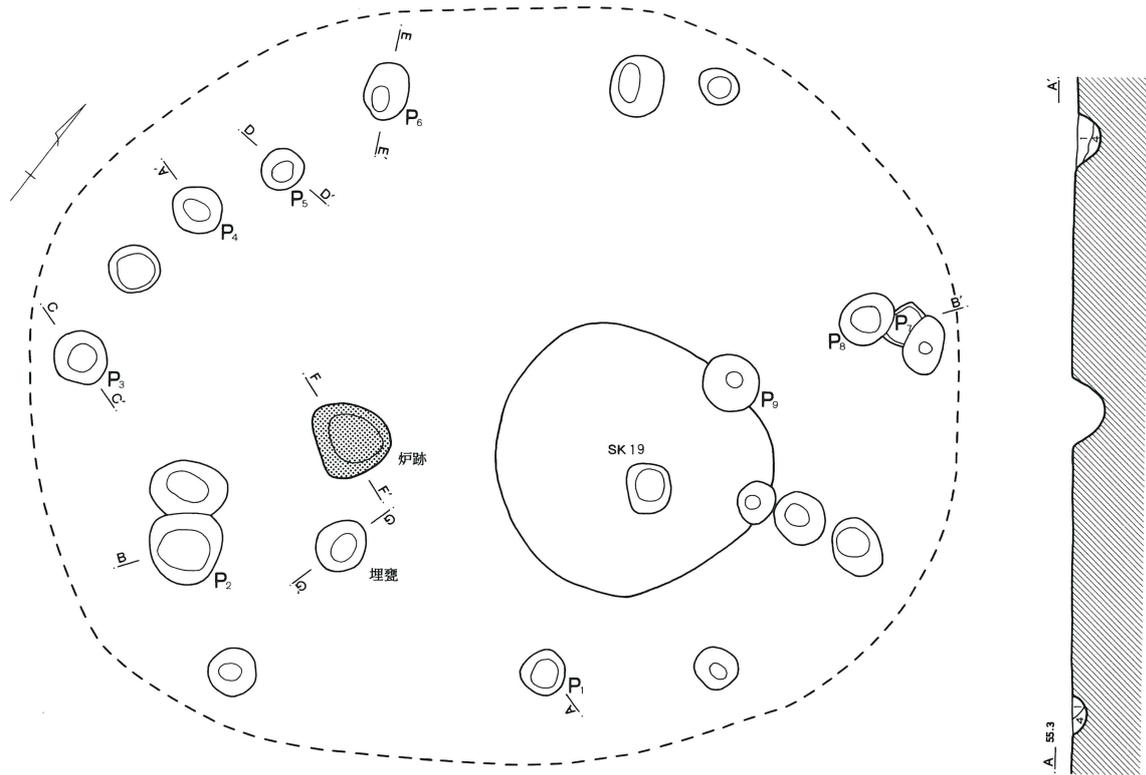
1・2は同一個体で、角押文列が施文される。猪沢式に並行するものと思われる。3も同時期のものと思われる、横位の隆帯に沿って角押文が施文される。4は隆帯による方形区画内部にキャタピラ文が充填される

ものである。5は円筒形の深鉢である。胴部中段に1条の沈線が巡り、胴上半部の文様帯と胴下半部の地文部を区画する。地文はRL単節の縄文が右下がりに回転施文される。

6・7・10はキャリパー類の口縁部文様帯である。11～13は隆帯による懸垂文が垂下する胴部である。14～16は縦位の撚糸文が施文される胴部、17は櫛歯状工具による条線が施文される。18～20は連弧文系の土器である。

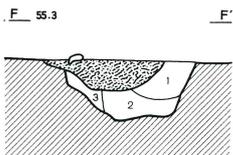
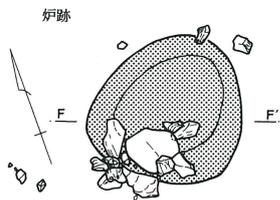
21・22はキャリパー類の口縁部で21は沈線のみ、22

第31図 A区第10号住居跡



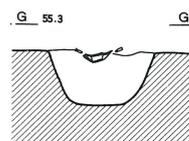
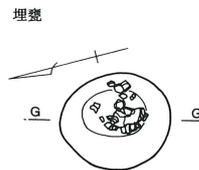
A区S J 10

- 1 黒褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む
- 2 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む
- 3 黒褐色土 : ロームブロック多く含む
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む
- 5 暗黄褐色土 : ロームブロック多く含む



A区S J 10炉跡

- 1 暗褐色土 : 焼土粒子やや多く含み、縮まり欠く
- 2 黒褐色土 : 被熱したロームブロック多く含み、焼土粒子微量含む 縮まり欠く
- 3 暗黄褐色土 : 被熱したロームブロック多く含み、焼土粒子微量含む 縮まり欠く



A区S J 10埋甕

- 1 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子微量含む



は隆帯+沈線による文様が描かれる。23~25・37は磨消し懸垂文の描かれる胴部、26は磨消し縄文による曲線モチーフである。27は縄文のみ施文される胴下半部、28は無文地に篋状工具によるキャタピラ文が施文される。

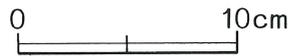
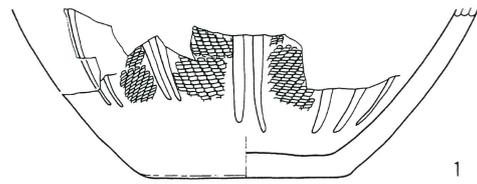
29~32は櫛歯状工具による条線が施文される胴部で、深鉢ないし両耳壺に伴うものであろう。33は同様の条線がみられる底部で、両耳壺に伴うものである。34~36は無文の口縁部である。38は横位の細沈線がみられる破片で横方向の研磨が徹底される。

39は曾利系の個体で刻みを伴う縦位の隆帯が垂下する。地文は半裁竹管状工具による縦位の集合沈線である。

A区第10号住居跡（第31図~第33図）

H-7・8区に所在する。炉跡を中心に大小のピットのみが6.8m×5.5mにわたって散在する。壁は残存せず、壁溝も検出できなかった。ピットの分布範囲が第16号土壌と重なるが、新旧関係は不明である。

第32図 A区第10号住居跡出土土器（1）



全てのピットが炉跡に伴うものであるかは不明であり、むしろ複数軒の遺構が重複する可能性もあるが、P-1~5などが炉跡を中心とした環状の配置となっており、壁柱穴を構成するものとみられる。深さは浅いもので16cm、深いもので75cmを測る。

炉跡はピット群の内部南西寄りで見出された。検出状態では不整楕円形の地床炉であったが、炉上面南よ

第33図 A区第10号住居跡出土土器（2）

